

『往生要集』講読(十一)

一 念仏利益・念仏証拠・往生諸行 一

梯 信 暁

往生要集 卷下

天台首楞嚴院沙門源信撰

大文第七に、念仏利益を明かさば、大きに分ちて七あり。一には滅罪生善、二には冥得護持、三には現身見仏、四には当来勝利、五には弥陀別益、六には引例勸信、七には悪趣利益なり。その文おのおの多し、いま略して要を挙ぐ。

【現代語訳】

往生要集 卷下

天台宗首楞嚴院の僧源信撰

大文第七念仏利益―「念仏によって得られる利益」を示す章。七節に分ける。第一に、罪を滅ぼして善を生ずること、第二に、人知れず神仏が護ってくださること、第三に、この身のままで仏を見ること、第四に、来世に勝れた利益を受けること、第五に、阿弥陀仏独自の利益について、第六に、聖教の証文を列挙して信を勧め、第七に、悪道に墮ちた者が受ける利益について述べる。



第一に滅罪生善といふは、『観仏経』の第二(1)にのたまはく、「一時のなかに分ちて少分となして、少分のなかによく須臾のあひだも仏の白毫を念じて、心をして了々ならしめ、謬乱の想なく、分明正住にして、意を注ぐこと息まずして白毫を念ずるものは、もしは相好を見、もしは見ることを得ずとも、かくのごとき等の人は、九十六億那由他恒河沙微塵数劫の生死の罪を除却せん。たとひまた人ありて、ただ白毫を聞きて心に驚疑せず、歡喜し信受せん。この人もまた

八十億劫の生死の罪を却けん」と。また(2)のたまはく、「仏、世を去りたまひて後、三昧正受して仏の行を想ふものは、また千劫の極重の悪業を除かん」と仏の行歩の相は、上の助念方法門(3)のごとし。また(4)のたまはく、「仏、阿難に告げたまはく、〈なんぢ、今日より如来の語を持ちて、あまねく弟子に告げよ。仏の滅度の後に、好形像を造りて、身相をして具足せしめ、また無量の化仏の色像および通身の色を作り、および仏跡を画き、微妙の糸および頗梨珠をもつて白毫の処に安きて、もろもろの衆生をしてこの相を見ることを得しめよ。ただこの相を見て心に歡喜をなさば、この人は百億那由他恒河沙劫の生死の罪を除却せん」と。また(5)のたまはく、「老女の、仏を見て、邪見にして信ぜざるすら、なほよく八十億劫の生死の罪を除却しき。いはんや、また善き意をもつて恭敬し禮拜せんをや」と須達が家の老女の因縁は、かの『經』(6)に広く説くがごとし。また(7)のたまはく、「もろもろの凡夫および四部の弟子、方等經を誇り、五逆罪を作り、四重禁(8)を犯し、僧祇物を偷み、比丘尼を姪し、八戒齋(9)を破り、もろもろの悪事をなし、種々の邪見あらん。かくのごとき等の人、もしよく心を至して一日一夜、繫念(10)在前して、仏如来の一の相好を觀せば、もろもろの悪・罪障も、みなことごとく尽滅しな」と。また(11)のたまはく、「もしは仏世尊に帰依することあるもの、もしは名を称するものは、百千劫の煩惱の重障を除く。いかにいはんや、正心に念仏定を修せんをや」と。『宝積經』の第五(11)にのたまはく、「宝珠あり、種々色と名づく。大海のなかにあり、無量衆多の駛き流ありて大海に入るといへども、珠火の力をもつて水をして消滅せしめて、盈溢せざらしむるがごとく、かくのごとく如来・応・正等覺は菩提を証しをはりて、智火の力によりて、よく衆生の煩惱をして消滅せしめたまふことも、またかくのごとし乃至もまた人ありて、日々のうちにおいて如来の名号功德を稱説せば、このもろもろの衆生はよく黒闇を離れて、漸次にまさにもろもろの煩惱を焼くことを得べし。かくのごとくして『南無仏』と称念するもの、語業空しからじ。かくのごとき語業を、大炬を執りてよく煩惱を焼く」と。『遺日摩尼經』(12)にのたまはく、「菩薩は、また数千億万劫、愛欲のなかにありて罪のために覆はれたりといへども、もし仏經を聞きて一反も善を念ずれば、罪すなはち消尽す」と以上のもろもろの文は滅罪なり。『大悲經』の第二(13)にのたまはく、「もし三千大千世界のなかに満てらん須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢(14)を、もし善男子・善女人ありて、もしは一劫、もしは減一劫、もろもろの種々の称意の一切の樂具をもつて、恭敬し尊重し謙下して供養せん。もしまた人ありて、諸仏の所にして、ただ一たび掌を合せ、一たび名を称せん。かくのごとき福德を、前の福德に比ぶるに、百分にして一にも及

ばず。百千億分にして一にも及ばず。迦羅分⁽¹⁵⁾にして一にも及ばず。なにをもつてのゆゑに。仏如来はもろもろの福田のなかに最無上たるをもつてなり。このゆゑに仏に施するは大功德を成ず」と略して抄す。三千世界に満てる辟支仏をもつて称量することたまじかり。『普曜経』の偈⁽¹⁶⁾にのたまはく、

「一切衆生の、縁覚とならん、もし供養すること億劫にして、飲食・衣服・床臥具、檀香・雜香および名華をもつてすることあらんも、もし心を一にして十の指を叉へ、心をもつばらにしてみづから一の如来に帰してまつり、

口にみづから言を發して〈南無仏〉といふことあらば、この功德の福をば最上なりとなす」と。

『般舟経』に念仏三昧を説く偈⁽¹⁷⁾にのたまはく、

「たとひ一切みな仏となりて、聖智清淨にして慧第一ならん。みな徳劫よりその数を過ぐすまで、一偈の功德を講説し、泥洹に至るまで福を誦詠し、無数億劫にことごとく嘆誦すとも、

その功德を究め尽すことあたはじ。この三昧の一偈の事においてするを、一切の仏国のあらゆる地、四方四隅および上下の、

なかに満てらん珍宝をもつて布施し、用ゐて仏天中の天に供養せんも、もしこの三昧を聞くことあるものは、その福祐を得ること、かれに過ぎたらん。

安諦に諷誦説講するものは、譬へを引くとも功德喩ふべからず」と一仏の刹を破して塵となして、一々の塵を取りて、また碎くと、一仏刹の塵数においてするがごとくして、此一塵をもつて一仏刹となして、そこばくの仏刹の、なかに満てらん珍宝を諸仏に供養せん。これをもつて比となせり。以上生善。

『度諸仏境界経』⁽¹⁸⁾に説かく、「もしもろもろの衆生の、如来を縁じて、もろもろの行を生ずるものは、無数劫の地獄・畜生・餓鬼・閻魔王の生を断す。もし衆生ありて、一念も作意して如来を縁するものは、所得の功德限極あることなし。称量すべからず。百千万億那由他のもろもろの大菩薩の、ことごとく不可思議の解脱定を得んも、計校してその辺際を知ることあたはじ」と。『観仏経』⁽¹⁹⁾に、「仏、阿難に告げたまはく、へわれ涅槃しな後に、諸天・世人、もしわが名を称し、および『南無諸仏』と称せば、獲るところの福德無量無辺ならん。いはんやまた繫念して諸仏を念するものは、しかももろもろの障礙を滅除せざらんや」と以上、滅罪生善。その余は上の正修念仏門⁽²⁰⁾のこし。

(1) 『観仏経』の第二 『観仏三昧海経』卷二(『大正藏』一五、六五五頁上)中。

(2) また 『観仏三昧海経』卷六(『大正藏』一五、六七五頁下)。

(3) 助念方法門 大文第五「助念方法」の第三「対治懈怠」の第六「飛行自在」の記述を指す(本講読(七)一一一頁下―一二二頁上)。

(4) また 『観仏三昧海経』卷六(『大正藏』一五、六七五頁下)。

(5) また 『観仏三昧海経』卷六(『大正藏』一五、六七六頁中)。

(6) かの『経』 『観仏三昧海経』卷六(『大正藏』一五、六七五頁下)。須達長者の家に仕える老婆が、長者が釈尊に頻りに布施するのを嫌い、生涯釈尊の教を聞かないと誓ったが、後に釈尊の教化を受けて救われた、と説かれている。

(7) また 『観仏三昧海経』卷八(『大正藏』一五、六七八頁中)。

(8) 四重禁 四波羅夷罪。出家の守るべき最も嚴重な禁戒。殺生・偷盜・姪・妄語を言い、これを犯すと教団を追放される。

(9) 八戒齋 在家信者が月に六日(六斎日、八・十四・十五・二十三・二十九・三十日)、出家者と同じように守る生活規範。八戒に齋(食事に關する決まり)を加えて九箇条よりなる。①不殺生戒、②不偷盜戒、③不姪戒、④不妄語戒、⑤不飲酒戒、⑥不香油塗身戒(身体に香油を塗ったり化粧したりしない)、⑦不歌舞觀聽戒(歌舞をしたり觀たりしない)、⑧不高大床戒(ゆったりとした寢具で寝ない)、⑨不非時食戒(正午以後何も食べない)。

(10) また 『観仏三昧海経』卷八(『大正藏』一五、六八七頁上)。

(11) 『宝積経』の第五 『大宝積経』卷五(『大正藏』一一、三〇頁上)。

(12) 『遺日摩尼経』 『遺日摩尼宝経』(『大正藏』一一、一九一頁中)。

(13) 『大悲経』の第二 『大悲経』卷二(『大正藏』一一、九五六頁下)。

(14) 須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢 声聞乘の聖者の行位。「預流(須陀洹)・一來(斯陀含)・不還(阿那含)・阿羅漢」の四にそれぞれ「向(過程)・果(到達)」を立てて、「四向四果」の形で示される。本講読(二)四八頁(25)参照。

(15) 迦羅分 極めて短い時間。一加羅は千六百刹那に当たる。

(16) 『普曜経』の偈 『普曜経』卷八(『大正藏』三、五三七頁下)。

(17) 『般舟経』に念仏三昧を説く偈 『般舟三昧経』卷上(『大正藏』一三、九〇八頁上)。

(18) 『度諸仏境界経』 『度諸仏境界智光厳経』(『大正藏』一〇、九一六頁上)。

(19) 『観仏経』 『観仏三昧海経』卷三(『大正藏』一五、六六一頁上)。

(20) 正修念仏門 大文第四「正修念仏」の章を指す。たとえば第三「作願門」に発菩提心の利益を紹介する中、『摩訶止観』『華嚴経』『大般若経』の文を挙げ、「以上三の文、滅罪の益なり」と言う（本講読（四）四一頁上）。また第四「観察門」では、別相観の逐一に滅罪の文証が付記され（本講読（五）四六頁下）、難略観に白毫観の功徳を説く中に引用された『観仏三昧海経』に滅罪の教説が見える（本講読（六）九〇頁下）。

【現代語訳】

第一に、罪を滅ぼして善を生ずること。

『観仏三昧海経』の卷二に、「ほんの一瞬でも仏の白毫を心に思い描いて、心を研ぎすまし、想念の乱れを静め、心を白毫の一点に集中した状態を保つことができた者は、仏の姿をきちんと見ることができてもできなくても、九十六億那由他恒河沙微塵数劫のあいだ迷いの世界に繋ぎとめられるほどの罪を取り除かれるであろう。もしまた白毫の事を聞いて疑わず、喜んで受けいれる者は、八十億劫のあいだ迷いの世界に繋ぎとめられるほどの罪を取り除かれるであろう」と言う。また同じ経に、「釈尊が入滅されたのち、心を一点に集中した状態を保って、釈尊の歩く姿を思い描く者は、また千劫のあいだ迷いの世界に繋ぎとめられるほどの罪を取り除かれるであろう」と言う（釈尊の歩く姿については、すでに助念方法の章に述べた）。また同じ経に、「釈尊が阿難に次のようにおっしゃった。〈私が今から述べることをよく記憶して、すべての仏弟子に伝えてくれ。私が入滅したのち、私の姿によく似た像を造り、身体の特徴を残さず表現し、あるいは化仏をたくさん散りばめた後背を作り、足裏には千輻輪の模様を描き、美しい糸と水晶の珠を用いて白毫を表現して、多くの人がその像を見られるようにせよ。ただその姿を見て喜んでくれただけで、百億那由他恒河沙劫のあいだ迷いの世界に繋ぎとめられるほどの罪を取り除いてやろう〉」と言う。

また同じ経に、「老女が仏を見て、間違った考えのためにそれが仏であることを認められなくても、それでもなお八十万億劫のあいだ迷いの世界に繋ぎとめられるほどの罪を取り除かれたという。まして、善心をもって仏を敬い礼拝する者には、さらに大きな利益がもたらされるであろう」と言う（須達長者の家の老女が救われた話は、同じ経に詳しく説かれている）。

また同じ経に、「多くの愚か者や、出家の行者、在家の信者たちが、大乘経典を誹り、五逆の罪を作り、四重の禁戒を犯し、教団の財産を盗み、比丘尼を犯し、八戒斎を破り、多くの悪事を行い、種々の間違った見解を述べる等したとしても、

わずかに一昼夜でも誠心誠意、心を傾けて、仏の身にそなわる特徴の一つを観念するならば、多くの悪事も罪科も、すべて消え去るであろう」と言う。

また同じ経に、「仏に心から信順する者や、仏の名を称える者は、百千劫の間積み重ねてきた煩惱を取り除かれる。まして心を研ぎすまして念仏三昧の修行をする者はなおさらである」と言う。

『宝積経』の卷五には、「種々色という名の宝珠が、大海の中にある。はかりしれないほどの大量の水が、一挙に海に流れ込んでも、宝珠がその〈火〉の力によって水を蒸発させ、海があふれるのを防いでいる。それと同様、仏は悟りを完成した後、智慧の〈火〉の力によって、人々の煩惱を消し去ることができるのである。中略 毎日仏の名に込められた功徳を誉め讃える者がいたならば、彼らは苦しみの世界を離れ、やがて多くの煩惱を焼き捨てることができるだろう。〈南無仏〉と称えるならば、その言葉の働きは確かなものである。その言葉を、〈煩惱を焼き捨てる大きな松明〉と名づけるのである」と言う。

『遺日摩尼宝経』には、「菩薩が何億劫もの間、愛欲に沈み罪にまみれた生活をしていても、仏の教えを聞いて、一度でも心に善が芽生えれば、たちまち罪は消え去るだろう」と言う（以上多くの経文は罪を滅ぼすことの証文である）。

『大悲経』の卷二に、「善男善女がいて、世界中の声聞の聖者に対して、一劫あるいは一劫弱の間、聖者の望み通りの品々を山のように捧げ、敬いの心を尽くして謹んでもてなしたとしよう。またある者が、諸仏の前で一度だけ手を合わせ、一度だけ仏の名を称えたとしよう。前者の福德は後者の百分の一、何千億分の一、あるいは無量分の一にも及ばない。なぜなら仏は最高の福德の根源だからであり、したがって仏に敬いを捧げることが最も大きな福德をもたらす行為なのである」と言う（省略して引用した。この世のすべての群生仏に対する供養との比較も同様である）。

『普曜経』の偈に次のように歌われている。

「すべての縁覚聖者に対し 億劫かけて供養を尽くし

飲食・衣服・臥具・香華 どれほどお供えするよりも

ただ一心に手を合わせ ただ一仏に心を寄せて

口に〈南無仏〉称えれば その福德は最上なり」と。

『般舟三昧経』の偈に念仏三昧の功徳を説いて、次のように歌われている。

「すべての人がほとけとなって 智慧を極めて清らかに

億劫かけて偈を説いて 命の限り叫べども

念仏三昧説く偈を一つ 歌う功徳に及ばない

世界中のすべての国から 集め尽くした宝物を

この世で最も尊い仏に

念仏三昧説く声を

心静かに説き歌う

砕き、その微塵の二々をさらに微塵に砕いた一粒を一仏の国土に見なして、そのすべてを合わせた教の仏国土から集めた宝をもって、諸仏に捧げる功德と比較しているのである。以上は善を生ずることの文証である。

『度諸仏境界智光嚴經』に、「多くの人々が仏の教えを受けて修行するようになれば、何劫ものあいだ地獄・畜生・餓鬼・閻魔王の世界に生まれ続けなければならぬ縁を絶ち切ることができよう。ほんの一瞬でもしっかりとした意志をもって仏と縁を結ぶ者は、限りない福德を得られるだろう。とても量り知ることとはできない。無数の菩薩たちがそろって心を研ぎすまし、煩惱の苦しみから解放されるほどの境地に達したとしても、仏と縁を結ぶことによって得られる福德には遠く及ばない」と言う。

『観仏三昧海經』には、「仏が阿難におっしゃった。〈私が入滅した後、神々や人々が私の名を称え、あるいは《南無仏》と称えるならば、限りない福德が得られるだろう。まして心を傾けて諸仏を想念するものは、悟りを妨げる多くの障害を取り除かれるだろう〉」と言う以上は罪を滅ぼすことと善を生ずること。このほかの証文は正修念仏の章に挙げたとおりである。



第二に冥得護持といふは、『護身呪經』①にのたまはく、「三十六部の神王に、万億恒沙の鬼神ありて眷属となして、三帰を受けたるものを護る」と。『般舟經』②にのたまはく、「劫尽き壊焼する時」③に、この三昧を持てる菩薩は、たとひこの火のなかに墮つとも、火すなはちために滅しんこと、たとへば、大きな嬰の水の、小火を滅するがごとし。仏、跋陀和に告げたまはく、〈わが語るころは異なることなし。この菩薩は、この三昧を持てるに、もして帝王、もして賊、もして火、もして水、もして竜、もして蛇、もして閻叉・鬼神、もして猛獸、乃至もして人の禪を壊り、人の念を奪ふものも、たとひこの菩薩を中らんと欲せば、つひに中ることあたはじと。仏ののたまはく、〈わが語るころのごときは異なることなし。その宿命をば除きて、その余はよく中るものあることなし〉と。

「鬼神・乾陀」⑤とも擁護し、諸天・人民もまたかくのごとくせん。

ならびに阿須輪・摩睺勒も、この三昧を行せば、かくのごときことを得ん。

諸天ごとくともにその徳を頌め、天・人・竜神・甄陀羅、

諸仏も、嗟嘆して願のごとくならしめたまはん。經を誦誦し説きて人のためにせんがゆゑなり。

国々あひ伏ちて民荒乱し、飢饉しきりに臻りて苦窮を懐くとも、

つひにその命を中天せじ。よくこの經を誦して人を化するものは、

勇猛にしてもるもの魔事を降伏し、心に畏るるところなく毛豎たじ。

その功德行も不可議ならん。この三昧を行ずるものは、かくのごときことを

得ん」と『十住婆沙』⑥に、これらの文を引きはりてはく、「たゞ業報かならず受くべきものを除くと、云々。

『十二仏名經』の偈⑦にのたまはく、

「もし人、仏の名を持てば、衆魔および波旬⑧、

行住坐臥の処に、その便りを得ることあたはじ」と。

① 『護身呪經』 『灌頂經』卷三三、三帰五戒帶佩護身呪經(『大正藏』二二、

五〇二頁中) 略抄。疾病を司る「身栗頭不羅婆」等三十六の灌頂善神が眷属を率

いて、三帰五戒を受けた在家信者を守る、と説く。三帰は、「仏・法・僧」の三

宝への帰依で、仏教徒となることを意味する。五戒は在家信者の守るべき戒めで、

「不殺生戒・不偷盜戒・不邪淫戒・不妄語戒・不飲酒戒」を指す。

② 『般舟經』 『般舟三昧經』卷中(『大正藏』一三、九百十二頁下)。

③ 劫尽き壊焼する時 劫火を言う。「成・住・壞・空」の四劫の中、壊劫の

終わりに起こる火災が全てを焼き尽くす。本講説(一)一八頁(2)、(六)九五

頁(14)、(十)三三頁(39)参照。

④ 偈 『般舟三昧經』卷中(『大正藏』一三、九一三頁中)。

⑤ 鬼神・乾陀 仏法を守護する神。「天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦楼

羅・緊那羅・摩睺羅迦」を八部衆と言う。引文中の「乾陀」は乾闥婆(帝釈天に

仕える音楽神)、「阿須輪」は阿修羅(闘争の神)、「摩睺勒」は摩睺羅迦(蛇神)、

「甄陀羅」は緊那羅(音楽神)を指す。

⑥ 『十住婆沙』 『十住毘婆沙論』卷十二(『大正藏』二六、八八頁上)。

⑦ 『十二仏名經』の偈 『十二仏名神呪經』(『大正藏』二二、八六二頁中)。

⑧ 波旬 他化自在天の悪魔。人の智慧を断ち切り、悪を行わせるいう。

【現代語訳】

第二に、人知れず神仏が護ってくださいること。

『護身呪経』に、「三十六の善神が無数の眷属神を率いて、三帰を受けた者を護るであろう」と言う。

『般舟三昧経』には、「この世の終わりの大火災の時、念仏三昧に入っている菩薩が、火の中に墮ちたとしても、火はすぐに消えるだろう。大きな瓶の水が、わずかな火を消すように。釈尊が跋陀和菩薩におっしゃった。〈私の言うことに嘘はない。念仏三昧に入っている菩薩は、帝王や盜賊、火や水、龍や蛇、夜叉や鬼神、あるいは猛獸など、精神統一を乱し、心を狂わせるものがやって来ても、決して邪魔されることはない〉と。釈尊はおっしゃる、〈私の言うことに嘘はない。当人の前世の罪だけはどうしようもないが、それ以外に菩薩の修行を妨げるものは何もない〉と云う。

同じ経の偈に、次のように歌われている。

「念仏三昧行ずれば

鬼神・乾陀に阿須輪・摩睺勒
神々・人々もろとも

鬼神・乾陀に阿須輪・摩睺勒
行者を支え護るべし

龍神・甄陀羅、諸仏までもが

行者の徳をほめ讃えて言う

〈経の真実ひろめんとする

願いは必ず遂げられん〉と

いくさのために困荒れて

飢饉の苦しみ襲えども

行者はいのち承らえん

経の真実ひろめるために

いかなる苦難も乗り越えて

心に恐れを懐くことなし

念仏三昧行ずる者の

功德は言葉で表せない」と『十住毘婆沙論』に

は、この経文を引用した後、「ただ罪の報いが決定している者は除く」と言う。

「十二仏名経神呪経」の偈には、次のように歌われている。

「仏のみ名を心にたもてば

寝ても覚めても一日中

どんな悪魔が来ようとも

付ける隙はさらになし」と。



第三に現身見仏といふは、『文殊般若経』の下巻①にのたまはく、「仏のたまはく、へもし善男子・善女人、一行三昧②に入らんと欲はば、空閑に処してもるもの乱意を捨て、相貌を取らずして、心を一仏に繋けて、もつばら名字を称

すべし。仏の場所に随ひて身を端くして正しく向かひて、よく一仏において念々に相続せよ。すなはち念のうちに於いて、よく過去・未来・現在の諸仏を見てまつらん」と。導師③「釈していはく、「衆生障重くして、観成就しがたし。ここをもつて大聖悲憐して、ただもつばら名字を称せよと勧めたまふ」と。『般舟経』④にのたまはく、「前に聞かざるところの経巻を、この菩薩、この三昧を

持てる威神をもつて、夢のうちにことごとくみづからその経巻を得て、おのおのことごとく見、ことごとく経の声を聞かん。もし昼日に得ずは、もしは夜、夢のうちにしてことごとく仏を見たてまつることを得ん。仏、跋陀和に告げたまはく、へもしは一劫、もしは一劫を過ぎて、われ、この菩薩の、この三昧を持てるものを説き、その功德を説かんに、尽しをはるべからず。いかにいはんや、よくこの三昧を求め得たるものをや」と。また同経の偈⑤にのたまはく、

「阿弥陀の国の菩薩の、無央数百千の仏を見たてまつるがごとく、

この三昧を得たる菩薩もかなり。まさに無数百千の仏を見たてまつるべし

乃至

それこの三昧を誦受することあらば、すでにまのあたり百千の仏を見たてまつるとなす。

たとひ最後の大恐懼においても、この三昧を持たば畏るところなからん」と。

『念仏三昧経』の第九の偈⑥にのたまはく、

「もしはことごとく一切の仏、現在・未来および十方を見んと欲し、

あるいはまた妙法輪を転ずることを求めんには、また先づこの三昧を修習せよ」と。

『十二仏名経』の偈⑦にのたまはく、

「もし人よく心を至して、七日仏の名を誦せば、

清浄の眼を得て、よく無量の仏を見たてまつらん」と。

(1) 『文殊般若経』の下巻 『文殊般若経』巻下(『大正蔵』八、七三二頁中)。

(2) 一行三昧 真如法界は平等一相なりと観ずる三昧。本講読(六)九一頁

(14) 参照。

(3) 導師 善導『往生礼讃』(『大正蔵』四七、四三九頁上)中)。

(4) 『般舟経』 『般舟三昧経』巻中(『大正蔵』一三、九一三頁上)。

(5) 同経の偈 乃至以下は、『般舟三昧経』巻上(『大正蔵』一三、九〇八頁

中)。偈の前半は、宋・元・明三本および知恩院本『般舟三昧経』巻上の記述に

一致する『大正蔵』一三、九〇六頁脚注⑩)。ちなみに高麗版『大正蔵』本文、同九〇六頁下(九〇七頁上)では偈文ではなく、長行の形で、「阿弥陀仏刹の諸菩薩の、常に不可計の仏を見るがごとく、かくのごとく菩薩三昧を得れば、常に不可計の仏を見るをもって……」となっている。

(6) 『念仏三昧経』の第九の偈 『大方等大集経菩薩念仏三昧分』巻九(『大正蔵』一三、八六五頁中)。

(7) 『十二仏名経』の偈 『十二仏名神呪経』(『大正蔵』二二、八六二頁上)。

【現代語訳】

第三に、この身のままで仏を見ること。

『文殊般若経』下巻に、「釈尊がおっしゃった。善男善女が一行三昧に入ろうとするならば、静かなところで心の乱れを整え、特定の相好を観ずるのではなく、心を一仏に集中して、ただひたすら仏の名を称えよ。仏のまします方向に正対して威儀を正し、一仏を心に念じ続けよ。するとまもなく過去・現在・未来の諸仏を見ることができるよう」と言う。

善導がこの文を釈して、次のように言う。「多くの人々は罪が重くて観念の成就が困難である。そこで釈尊はそれを憐れみ、ただひたすら仏の名を称えよと勧められたのだ」と。

『般若三昧経』には、「菩薩は念仏三昧を成就した威力によって、今まで聞いたこともなかった経典を、夢の中で入手し、それを完全に見、聞くことができるだろう。昼間には得られなくとも、夜、夢の中で、仏の姿をはっきりと見ることができるよう。釈尊が跋陀和菩薩におっしゃった。一劫あるいはそれ以上の間、念仏三昧を成就した菩薩のことを説き、その功德を説き続けても、説き尽くすことはできない。まして念仏三昧のことを知り得た者のことなど、到底説き尽くせるものではない」と言う。

また同じ経の偈に、次のように歌われている。

「阿弥陀の国の菩薩らが

念仏三昧得しひとは

念仏三昧説くひとは

いのちの終わりに臨んでも

『大集経菩薩念仏三昧分』巻九の偈には、次のように歌われている。

「現在・未来のあらゆる世界の

また説法を聞きたければ

無数の仏を見るように

無数の仏を見るだろう 中略

すでに無数の仏を見る

三昧たもてば恐怖なし」と。

すべての仏を見たければ

念仏三昧習うべし」と。

『十二仏名神呪経』の偈には、次のように歌われている。
「誠の心で七日間
清浄世界が現れて
無数のほとけを見るだろう」と。

第四に当来勝利といふは、『華嚴』の偈⑪にのたまはく、

「もし如来の小的の功德をも念じ、乃至一念の心にも専仰してまつらば、

もろもろの悪道の怖れ、ことごとく永く除こり、智眼はここにおいてよく深く

悟れり」と智眼天王の頌なり。

『般若経』の偈⑫にのたまはく、

「その人つひに地獄に墮せじ。餓鬼道および畜生を離れん。

世々に生るところにて宿命を識らん。この三昧を学せば、かくのごとき

とを得てん」と。

『観仏経』⑬にのたまはく、「もし衆生ありて、一たびも仏身の、上のごとき功德・相好・光明を聞かば、億々千劫にも悪道に墮ちず、邪見・雑穢の処に生れず、つねに正見を得て、勤修すること息まざらん。ただ仏の名を聞くに、かくのごとき福を獲。いかにいはんや、念を観仏三昧に繋げんをや」と。『安樂集』⑭にいはく、『大集経』⑮にのたまはく、
「諸仏、世に出てたまふに、四種の法ありて、衆生を度したまふ。なんらをか四となす。一には、口に十二部経を説きたまふ。すなはちこれ、法施をもつて衆生を度したまふなり。二には、諸仏如来には無量の光明・相好まします。一切の衆生、ただよく心を繋げて観察すれば、益を獲ずといふことなし。すなはちこれ、身業をもつて衆生を度するなり。三には、無量の徳用・神通道力・種々の神変まします。すなはちこれ、神通道力をもつて衆生を度するなり。四には、諸仏如来には無量の名号まします。もしは総、もしは別なり。それ衆生ありて、心を繋げて称念すれば、障を除き、益を獲て、みな仏前に生れずといふことなし。すなはちこれ、名号をもつて衆生を度するなり」と云々。あるがいはく、『正法念経』にこの文あり」と。『十二仏名経』の偈⑯にのたまはく、

「もし人、仏の名を持てば、怯弱の心を生ぜず、

智慧ありて諛曲なきは、つねに諸仏の前にあり。

もし人、仏の名を持てば、七宝の華のなかに生ず。

その華千億葉にして、威光の相具足せり」と以上諸文、永く悪趣を離れて浄土に往生するなり。

『観仏経』⑦にのたまはく、「もしよく心を至して、繫念うちに入り、端坐し正受して仏の色身を觀せば、まさに知るべし、この人の心は仏の心のごとくにして、仏と異なることなからん。煩惱ありといへども、もろもろの悪のために覆蔽せられじ。未來世に大法の雨を雨らせん」と。『大集の念仏三昧経』の第七⑧にのたまはく、「まさに知るべし、かくのごとき念仏三昧は、すなはち一切の諸法を総撰することをなす。このゆゑに、かの声聞・縁覚の二乗の境界にあらず。もし人、しばらくもこの法を説くを聞かば、この人は当来に決定して仏になること疑あることなからん」と。第九⑨にのたまはく、「ただよく耳にこの三昧の名を聞かば、たとひ読せず誦せず、受せず持せず、修せず習せず、他のために転ぜず、他のために説かず、また広く分別し釈することあたはずとも、しかもかのもろもろの善男子・善女人、みなまさに次第に阿耨菩提を成就すべし」と。同偈⑩にのたまはく、

「もしもろもろの妙相を円満し、もろもろの好上の莊嚴を具足せんと欲ひ
および清浄の処に転生することを求めんものは、かならず先づこの三昧を受
持せよ」と。

またある『経』⑪にのたまはく、

「もし仏の福田において、よく少分の善を殖えつれば、
初めには勝善趣を獲、後にはかならず涅槃を得」と。

『大般若経』⑫にのたまはく、「仏を敬ひ憶ふによりて、かならず生死を出でて涅槃に至る。これを置きて、乃至、仏を供養せんがために、一華をもつて虚空に散ずるもまたかくのごとし。またこれを置きて、もし善男子・善女人等、下一たび〈南無仏陀大慈悲者〉と称するに至らば、この善男子・善女人等は、生死の際を窮むるまで善根尽くすることなくして、天・人のなかにしてつねに富樂を受け、乃至、最後には般涅槃を得ん」と略して抄す。『大悲経』の第二⑬、これに同じ。『宝積経』以下、粗なり。『宝積経』⑭にのたまはく、「もし衆生ありて、如来の所にして微善を起さば、苦際を尽すまで畢竟して壞せず」と。また⑮にのたまはく、「もし菩薩ありて、勝意樂をもつてよくわが所において父の想を起さば、かの人はまさに如来の數に入ることを得て、わがごとくにして異なることなからん」と。『十二名名經』の偈⑯にのたまはく、

「もし人、仏の名を持たば、世々所生の処に、

身通をもつて虚空に遊び、よく無辺の刹に至りて、

まのあたり諸仏を觀たてまつりて、よく甚深の義を問ふ、乃至
ために微妙の法を説きて、かれに菩提の記を授けたまふ」と。

『法華経』の偈⑰にのたまはく、

「もし人、散乱の心にして、塔廟のなかに入り、

一たび〈南無仏〉と称すれば、みなすでに仏道を成ず」と。

『大悲経』の第三⑱に、「仏、阿難に告げたまはく、〈もし衆生ありて、仏の名を聞かば、われ説かく、この人は畢定してまさに般涅槃に入ることを得べし〉」と。『華嚴経』の法幢菩薩の偈⑲にのたまはく、

「もしもろもろの衆生ありて、いまだ菩提心を発さざらんも、

一たび仏の名を聞くことを得ば、決定して菩提を成ぜん」と以上のもろもろの文、菩提を得ることなり。

ただ名号を聞くすら、勝利かくのごとし。いはんやしばらくも相好・功德を觀念し、あるいはまた一華・一香を供養せんをや。いはんや一生に勤修する功德、つひに虚しからじ。すなはち知りぬ、仏法に値ひ、仏号を聞くことは、これ少縁にあらず。このゆゑに『華嚴経』の真実慧菩薩の偈⑳にのたまはく、

「むしろ地獄の苦を受くとも、諸仏の名を聞くことを得よ。

無量の樂を受くとも、仏の名を聞かざることなかれ」と。

以上の四の門は、総じて諸仏を念ずる利益を明かす。そのなかに、『観仏経』には釈迦をもつて首めとなす。『般舟経』は多く弥陀をもつて首めとなす。理、実にはともに一切の諸仏に通ず。『念仏経』は三世の諸仏に通ず。

『観仏経』㉑にのたまはく、「この人の心は、仏の心のごとくにして、仏と異なることなし」と。また『観経』㉒にのたまはく、「仏、阿難に告げたまはく、〈諸仏はこれ法界の身なり、一切衆生の心想のうちに入りたまふ。このゆゑに、なんぢら心に仏を想ふ時、この心すなはちこれ三十二相・八十随形好なり。是の心、仏に作る。是の心、是仏なり。諸仏の正遍知海は、心想より生じたまふ〉」と以上。この義いかん。答ふ。『往生論』の智光の『疏』㉓にこの文を釈していはく、「衆生の心に仏を想ふ時に当りて、仏の身相みな衆生の心のなかに顯現す。たとへば、水清ければすなはち色像現す。しかも水と像とは、一ならず異なるがごとし。ゆゑにいふ、仏の相好の身は、すなはちこれ心想なりと。〈是心作仏〉とは、心よく仏に作るなり。〈是心是仏〉とは、心がほかに仏なきなり。たとへば、火の木より出づれども、木を離れることを得ず、木を離れざるをもつてのゆゑに、すなはちよく木を焼きて火となる。木を焼けば、すなはちこれ火たる

がごとし」と以上。また余の釈あり。学者さらに勤へよ。わたくしにはいはく、『大集経』の「日藏分」⁽²⁾にのたまはく、「行者、この念をななく、これらの諸仏は従りて来るころなし。去りて至るところなし。ただわが心の作なり。三界のなかににおいて、この身は因縁なり、ただこれ心の作なり。われ、覚観に随ひて、多を欲すれば多を見、少を欲すれば少を見る。諸仏如来は、すなはちこれわが心なり。なにももつてのゆゑに。心に随ひて見るがゆゑに。心、すなはちわが身なり。すなはちこれ虚空なり。われ、覚観によりて無量の仏を見てまつ。われ、覺心をもつて仏を見てまつり、仏を知る。心は心を見ず、心は心を知らず。われ、法界を觀するに、性、牢固なることなし。一切の諸仏はみな覺觀の因縁より生れたまふ。このゆゑに、法性はすなはちこれ虚空なり、虚空の性もまたこれ空なり」と以上。この文の意『觀経』に同じ。光師の釈また違ふことなし。

問ふ。心、仏に作ることを知るに、なんの勝利がある。答ふ。もしこの理を觀すれば、よく三世の一切の佛法を了す。乃至、一たびも聞かば、すなはち三途の苦難を解脱することを得。『華嚴経』の如来林菩薩の偈⁽²⁾にのたまふがごとし。

「もし人、三世の一切の仏を知らんと欲せば、
まさにかくのごとく觀ずべし。心もろもろの如来を造る」と。

『華嚴の伝』⁽²⁾にはいはく、「文明元年に、京師の人、姓は王、その名を失せり。すでに戒行なく、かつて善を修せず。患によりて死を致す。二人に引かれて地獄の門の前に至りぬ。見れば一の僧あり。これ地藏菩薩なりといふ。すなはち王氏に教へて、この一の偈を誦せしむ。これに謂らひていはく、「この偈を誦し得ては、よく地獄を排ひてん」と。王氏つひに入りて閻羅王に見ゆ。王、この人に問ふ、「功德ありや」と。答へていはく、「ただ一の四句の偈を受持せり」と。つぶさに上に説くがごとし。王、つひに放勉しつ。この偈を誦する時に当りて、声の及ぶところの受苦の人はみな解脱することを得つ。王氏、三日ありてはじめて蘇りぬ。この偈を憶持して、もろもろの沙門に向かひてこれを説く。偈の文を示験するに、まさに知りぬ、これ『華嚴経』の第十二卷の「夜摩天宮無量諸菩薩雲集説法品」⁽²⁾なり。王氏みづから、空觀寺の僧定法師に向かひて、説きてしかりといふ」と略抄。

(1) 『華嚴』の偈 八十卷本『華嚴経』卷二(『大正蔵』一〇、九頁下)。帝釈天が三十三天の神々を讚えた頌の一節。智眼天王を讚える句が引用されている。

(2) 『般舟経』の偈 『般舟三昧経』卷中(『大正蔵』一三、九一三頁中)。

(3) 『觀仏経』 『觀仏三昧海経』卷九(『大正蔵』一五、六八七頁下)。

(4) 『安樂集』 道緯『安樂集』卷上(『大正蔵』四七、四頁中)。
(5) 『大集経』 道緯はこの引用の直前に『大集経』月藏分の文を挙げ、次いで「彼の経に云う」としてこの文を引く。ところが『大集経』には該当する文がなく、古来典拠不明の文とされてきた。迦才『浄土論』卷下(『大正蔵』四七、一〇一頁上)には、「正法念経に説く」として類似の文を挙げているが、『正法念経』にも該当文は見えない。源信が引文に続いて、「あるがいはく、『正法念経』にこの文あり」と言うのはこれを指す。内藤知康『安樂集講読』一七〇頁(永田文昌堂、一九九九年)には、江戸時代の註釈書を参照し、『大集経』卷九・十一・十七・十九・二十六に類似の記述があることを指摘している。

(6) 『十二仏名経』の偈 『十二仏名神呪経』(『大正蔵』二二、八六二頁上)中。
(7) 『觀仏経』 『觀仏三昧海経』卷一(『大正蔵』一五、六四六頁上)。
(8) 『大集の念仏三昧経』の第七 『大方等大集経菩薩念仏三昧分』卷七(『大正蔵』一三、八五七頁下)。

(9) 第九 『大方等大集経菩薩念仏三昧分』卷九(『大正蔵』一三、八六四頁中)。
(10) 同偈 『大方等大集経菩薩念仏三昧分』卷九(『大正蔵』一三、八六五頁中)。

(11) ある『経』 『俱舍論』卷二十七(『大正蔵』二九、一四一頁下)。

(12) 『大般若経』 『大般若経』卷五百二十五(『大正蔵』七、六九四頁上)中)略抄。

(13) 『大悲経』の第二 『大悲経』卷二(『大正蔵』一一、九五六頁上)中)。

(14) 『宝積経』 『大宝積経』卷三十七(『大正蔵』一一、二一〇頁下)。

(15) また 『大宝積経』卷六(『大正蔵』一一、三三頁下)。

(16) 『十二仏名経』の偈 『十二仏名神呪経』(『大正蔵』二二、八六二頁中)。

(17) 『法華経』の偈 『法華経』卷一(『大正蔵』九、九頁上)。

(18) 『大悲経』の第三 『大悲経』卷三(『大正蔵』一一、九五六頁上)中)。

(19) 『華嚴経』の法幢菩薩の偈 八十卷本『華嚴経』卷二十三(『大正蔵』一〇、一二四頁上)。

(20) 『華嚴経』の真実慧菩薩の偈 八十卷本『華嚴経』卷十六(『大正蔵』一〇、八三頁上)。

(21) 『觀仏経』 『觀仏三昧海経』卷一(『大正蔵』一五、六四六頁上)。

(22) 『觀経』 『觀無量寿経』(『大正蔵』一一、三四三頁上)。

(23) 『往生論』の智光の『疏』 智光『無量寿経論釈』巻一。曇鸞『論註』巻上(『大正蔵』四〇、八三二頁上)と同文。智光(七〇九〜七八〇頃)は元興寺の僧で、奈良時代を代表する三論学者。『浄名玄論略述』五巻(巻四、巻五末は缺)、『般若心経述義』一巻が現存、ほかに目録類の記録によって『法華玄論略述』『中論疏述義』『大般若経疏』『無量寿経論釈』等の著作があったことが知られる。元興寺極楽坊の本尊智光曼荼羅の感得者と伝えられ、阿弥陀仏信仰を持っていたことが知られる。『無量寿経論釈』五巻は現存しないが、平安・鎌倉期の文献中に多くの引用があり、諸先学が逸文集成を制作して、内容の概略を把握することができる。それによるとこの書は、世親『浄土論』の註釈書で、曇鸞『論註』のほぼ全文を踏襲した上に、それを補う形で註釈を加えるという形式をとる文献であることがわかる。『往生要集』には三箇所に言及されている。平安中期の叡山では、曇鸞の『論註』が流布していなかったようで、『浄土論』の註釈書としては、智光の『無量寿経論釈』が用いられていた。

(24) 『大集経』の「日蔵分」 『大集経』巻三十八(『大正蔵』一三、二五六頁中)。

(25) 『華嚴経』の如来林菩薩の偈 六十巻本『華嚴経』巻十(『大正蔵』九、四六六頁上)。

(26) 『華嚴の伝』 法蔵『華嚴経伝記』巻四(『大正蔵』五一、一六七頁上)。

(27) 『華嚴経』の第十二巻の〈夜摩天宮無量諸菩薩雲集説法品〉 現行六十巻本の巻十、夜摩天宮菩薩説偈品の文(註(26))に一致し、八十巻本巻十九、夜摩天宮中偈讚品(同一〇二頁上〜中)にも類似の文がある。澄観(七三八〜八三八)の『華嚴経随疏演義鈔』巻四十二にも、同様の話を紹介し、「旧華嚴経第十二巻、新経第十九夜摩天宮無量諸菩薩雲集説法品の偈に当たる」と言う。

【現代語訳】

第四に、来世に勝れた利益を受けること。

『華嚴経』の偈に、次のように歌われている。

「ほとけの功德をわずかに念じ

三悪道の恐れ除かれ

句である。

『般舟三昧経』の偈には、次のように歌われている。

「念仏三昧学ぶひと

餓鬼・畜生の難にもあわず

心かたむけひとたび仰げば
智眼天王さとりたり」と智眼天王を讃える

地獄に墮ちることはなし

過去世のことを明らかに知る」と。

『観仏三昧海経』には、「仏の身に備わる功德・相好・光明についての教説を一度でも聞くならば、長く悪道に墮ちることなく、不正のはびこる汚れた世界に生まれることもない。常に正しい教えを受けて、たゆまず努力することができよう。ただ仏の名を聞くだけでも、このような福德が得られるのだ。まして心を傾けて仏を観念する行者は、さらに大きな福德を得られよう」と言う。

『安楽集』には、次のように言う。「『大集経』に言う。〈諸仏が世に出られる際、四つの方法で人々を救われる。その四つの法とは、第一に十二部経を説く。これは教えの言葉を施して人々を救うのである。第二に限りない光明・相好を身に備え、心を傾けて観念するすべての者に大きな福德を与える。これは身体を駆使して人々を救うのである。第三にたゆまぬ働きかけや目に見えない力、人知を超えた能力を発揮する。これは不可思議の神通力によって人々を救うのである。第四に諸仏如来には共通の呼び名や個別の名前等、多くの名があり、心を傾けてそれを称えれば、悟りへの妨げを取り除き、福德を与えて、皆を仏の世界に生まれさせる。これは名号によって人々を救うのである〉」と。ある者は、『正法念

処経』にこの文があると言う。

『十二名神呪経』の偈には、次のように歌われている。

「ほとけのみ名をたもつひと 恐れ的心はさらになし
智慧ありへつらいなきひと 常に諸仏の前にあり

ほとけのみ名をたもつひと 七宝蓮華の中にあり

その花びらは無限に重なり 威嚴に満ちて輝けり」と以上の諸文は、長く悪道の難をのがれて浄土に往生するという利益の証文である。

『観仏三昧海経』に、「誠の心を傾けて、姿勢を正して坐り、心を正して仏の姿を観念する者は、仏の心と等しく、仏と何ら異ならないことが理解できよう。煩惱はまだあるが、心が悪に支配されることはない。来世にはすばらしい説法をする人となるだろう」と言う。

『大集経菩薩念仏三昧分』巻七には、「念仏三昧の法は、仏法のすべてを包含するものだと理解できるだろう。だからこの三昧は、声聞・縁覚の聖者を対象とする教えではない。この三昧の教えを少しでも聞く者は、来世には必ず仏となるだろう」と言う。

同じ経の巻九には、「念仏三昧という言葉は聞くだけで、その教えを自ら読むことも知ることも実践することも人に説くこともなく、また皆にわかりやすく解説することができなくても、皆やがて無上の悟りを完成することができるだろう」と言う。

同じ経の偈には、次のように歌われている。

「その身ほとけの姿のごとく

浄土に生まれたいと思えば

ある経には、次のように歌われている。

「ほとけは福德生ずるみなもと

まずは人間・天上の生をうけ

『大般若経』には、次のように言う。「仏を敬い慕う者は、必ず迷いの世界を

離れて悟りを成就する。これについては詳説しない。また、仏を敬いを捧げる

ために一片の花を空中に撒く者も同様であるが、これについても詳説しない。も

し善男善女が、たった一度でも〈南無仏陀大慈悲者〉と称えるならば、その善行

の効果は娑婆に居る間中尽きることなく、人間・天上の世界において常に幸福に

恵まれ、やがてついに仏の悟りを得るだろう」と省略して引用した。『大悲経』巻二に

も同様の記述がある。『大宝積経』以下は簡略にとどめる。

『大宝積経』に、「仏の前ではほんの少しの善をなせば、その善は娑婆に居る間
中けって消えることがない」と言う。

また同じ経に、「高い志をもって私（仏）を父と慕う菩薩は、やがて仏となり
私と同じ境地に達するだろう」と言う。

『十二仏名神呪経』の偈には、次のように歌われている。

「ほとけのみ名をたもつひと

神通力を身につけて

親しく諸仏にまみえつつ

仏は微妙の法を説き

『法華経』の偈には、次のように歌われている。

「乱れた心を静めることなく

ひとたび〈南無仏〉称えれば

『大悲経』巻三に、「釈尊が阿難におっしゃった。〈仏の名を聞く者は、必ず

悟りを完成する〉」と言う。

『華嚴経』に法幢菩薩が偈を説いて、次のように歌っている。

「悟りを目指し人々救う菩薩の願い

ひとたびほとけの名を聞くだけで

は悟りの完成という利益の証文である。

ただ名号を聞くだけでも、勝れた利益を得られることは以上の通りである。ま

なおさらである。さらには一生の間につとめる修行はけっして無駄にはならない。
仏法に出会い、仏の名を聞くことは、けっして小さな縁ではない、ということが
理解できよう。

だから、『華嚴経』に真実慧菩薩が偈を説いて、

「地獄の苦しみ受けたとしても

無量の楽しみ受けたとしても

ているのである。

以上、第一「罪を滅ぼして善を生ずること」、第二「人知れず神仏が護ってく

ださること」、第三「この身のままで仏を見ること」、第四「来世に勝れた利益を

受けること」の四節は、一般に諸仏を念ずる利益について述べた。『観仏三昧海

経』は主として釈迦仏を念ずる法を説き、『般舟三昧経』は主として阿弥陀仏を

念ずる法を説くが、いずれも全ての仏に通ずる教説である。『大集経菩薩念仏三

昧分』は三世の諸仏に共通する念仏の方法を説いている。

問う。「観仏三昧海経」に、「仏を観ずる人の心は、仏の心と等しく何ら異なら
ない」と言う。

また『観無量寿経』には、「釈尊が阿難におっしゃった。〈諸仏は全宇宙に遍
満し、すべての人々の心の中にも入られる。だからお前たちが心に仏を想う時、

その心がそのまま仏の三十二相・八十随形好なのだ。その心が仏となる。心が仏

そのものなのである。すべてを見通す諸仏の智慧は、行者の心が作り出すのであ

る〉」と言う。これはどういう意味か。

答え。智光の『無量寿経論釈』にこの文を釈して、次のように言う。「人々が

心に仏を想う時、仏の姿は人々の心の中に現れる。清らかな水に物が映り込むの

と同様である。しかも水と影像とは同じ物ではなく、別の物でもない。だから仏

の姿はすなわち人々の想念だ、と言っているのである。〈その心が仏となる〉とは、人々

の心が仏を作り出すということである。〈心が仏そのものである〉とは、心

の外に仏は存在しないということである。たとえば、火は木より発生するけれどど

も、木を離れては存在できない。木を離れないからこそ木を焼いて火となること

ができるのである。木を焼けばそれが火である、というようなことである」と以

上。ほかにも諸説ある。学者たちよ、さらに研究せよ。私見を述べよう。

『大集経』日藏分に、「行者は次のように想念する。〈これらの諸仏は、どこ

かから来るものではない。どこかへ行くものでもない。ただ我が心が作り出したも

のである。迷いの世界の中で、因縁によって心が作り出したものである。私の感

覚に支配されていて、多くを見ようと思えば多くを見、少しかだけ見ようと思えば

少しだけを見る。諸仏如来は我が心そのものである。なぜなら、心によって見るからである。心は、私の身体の一部であると同時に、無限の広がりを持っている。私は自分の感覚で無量の仏を見る。自分の感覚によって仏を見、仏を知る。心は心を見ることができないし、心を知ることもできない。この世を見渡したところ、本質的に変化しないものはない。すべての仏は、私の感覚によって生ずるのである。だから世界は無量の広がりをもつのであり、その空間の本質もまた捉えようのないものである」と以上。この文は『観無量寿経』と同意であり、智光の釈もまたこれと同じ立場である。

問う。心が仏となるということを知れば、どのような勝れた利益が得られるのか。

答え。この理論を理解できれば、過去・現在・未来のすべての仏の教えを理解できる。あるいは一度でも聞くことができれば、三悪道の苦難から解放される。

『華嚴経』に如来林菩薩が、次のように歌っている通りである。

「三世の諸仏を知りたくば

心が仏を作ると想え」と。

『華嚴伝』に次のように言う。「唐の文明元年(六八四)、都に姓を王という人物がいた。名はわからない。仏教とは無縁で、善を行うこともなく、病気で死んだ。二人の獄卒に引っぱられて地獄の門に至り、ふと見ると一人の僧がいた。地藏菩薩だとう。王氏に『華嚴経』如来林菩薩の偈を教え、唱えさせ、この偈を唱えれば、地獄の難を避けることができる」と告げた。王氏は地獄の門を入り、閻羅王に謁した。閻羅王は、「生前に何か功德を為したか」と問う。「四句の偈を一つだけおぼえています」と答え、その偈を唱えた。閻羅王はそれを聞き、王氏を放免した。王氏がその偈を唱えると、その声を聞いた悪道の者がみな苦しみから解放された。王氏は三日後に娑婆に蘇生した。その後、その偈をたち、多くの僧に説き示した。調べてみたところ、その偈が『華嚴経』第十二卷、夜摩天宮無量諸菩薩雲集説法品の文であることがわかった。王氏本人が空観寺の僧定法師に告げたという」と省略して引用した。

第五に弥陀を念ずる別益をいはず、行者をしてその心決定せしめんがためのゆゑに、別にこれを明かす滅罪生善と冥得護持と現身見仏と将来勝利とは、次いでのことし。『観経』

の像観^{ぞうかん}に説きてのたまはく、「この觀をなすものは、無量億劫の生死の罪を除きて、現身のなかに念仏三昧を得」と。また^②のたまはく、「ただ仏の名・二菩薩の名を聞くに、無量劫の生死の罪を除く。いかにいはんや憶念せんをや」と。

また^③のたまはく、「ただ仏像を想ふに、無量の福を得。いはんやまた仏の具足せる身相を觀ぜんをや」と。『阿弥陀思惟經』^④のたまはく、「もし転輪王、千万歳のうちに四天下に満てる七宝をもつて十方の諸仏に布施せんも、苾芻^{びじゆ}・苾芻尼^{びじゆに}・優婆塞^{うぱさい}・優婆夷等の、一たび弾指するあひだも坐禅して、平等心をもつて一切衆生を憐愍して、阿弥陀仏を念ずる功德にはしじ」と以上、滅罪生善。『讚浄土經』^⑥のたまはく、「あるいは善男子、あるいは善女人、無量寿の極楽世界の清浄の仏土の功德莊嚴において、もしはすでに願を發し、もしはまさに願を發すべく、もしはいま願を發すは、かならずかくのごとく、十方の面に住したまへる十恒河沙の諸仏世尊の、撰受したまふところたらん。説のごとく行ずるものは、一切さだめて阿耨菩提において退転せざることを得。一切さだめて無量寿の極楽世界に生れん」と。『観経』^⑦のたまはく、「光明あまねく十方世界の念仏の衆生を照らして、撰取して捨てたまはず」と。また^⑧のたまはく、「無量寿の化身無數にして、觀世音・大勢至と、つねにこの行人の所に來至したまふ」と。

『十往生經』^①に、釈尊、阿弥陀の功德、国土の莊嚴等を説きはりてのたまはく、「清信士^{しやうしんし}・清信女^{しやうしんにょ}、この經を誦誦し、この經を流布し、この經を恭敬し、この經を誦誦せず、この經を信樂し、この經を供養せん。かくのごとき人の輩は、この信敬によりて、われ、今日よりつねに前の二十五の菩薩をしてこの人を護持せしめ、つねにこの人をして病なく悩みなく、悪鬼・惡神、また中害せず。またこれを悩まざす、また便りを得ざらしめん」と以上乃至、睡寤・行住・所至の処、みなごとく安穩ならしめん、云々。唐土の諸師^⑨のいはく、「二十五の菩薩、阿弥陀仏を念じ、往生を願ふものを擁護せん」と云々。これまたかの『經』の意に違はず

二十五の菩薩とは、觀世音菩薩・大勢至菩薩・藥王菩薩・藥上菩薩・普賢菩薩・法自在菩薩・師子吼菩薩・陀羅尼菩薩・虚空藏菩薩・德藏菩薩・宝藏菩薩・金剛藏菩薩・光明王菩薩・山海慧菩薩・華嚴王菩薩・衆宝王菩薩・月光王菩薩・日照王菩薩・三昧王菩薩・自在王菩薩・自在王菩薩・白象王菩薩・大威徳王菩薩・無辺身菩薩なり。『双卷經』^⑩に、かの仏の本願にのたまはく、「諸天・人民、わが名字を聞きて、五体を地に投げて、稽首し礼をなして、歡喜し信樂して、菩薩の行を修せば、諸天・世人、敬を致さずといふことなからん。もししからずば、正覺を取らじ」と以上、冥得護持。『大集經』の「賢護分」^⑪のたまはく、「善男子・善女人、端坐繫念し、心をもつばらにして、かの阿弥陀如来・応供・等正覺を想ひ、かくのごとき相好、かくのごとき威儀、かくのごとき大衆、かくのごとき説法を、聞

くがごとく繋念し、一心に相續して次第乱れず、あるいは一日を經、あるいはまた一夜せん。かくのごとくして、あるいは七日七夜に至るまで、わが所聞のごとく具足して念せんがゆゑに、この人、かならず阿弥陀如来・応供・等正覚を觀たてまつらん。もし昼の時に見たてまつることあたはずは、もしは夜分において、あるいは夢のうちに、阿弥陀仏はかならずまきに現じたまふべし」と。『觀經』⁽¹³⁾にのたまはく、「眉間の白毫を見るものは、八万四千の相好、自然にまきに見つべし。無量壽仏を見るものは、すなはち十方の無量の諸仏を見たてまつるなり。十方無量の諸仏を見たてまつることを得るがゆゑに、諸仏、現前に授記せん。これをあまねく一切色相を觀ずとなす」と以上見仏。『鼓音声王經』⁽¹⁴⁾にのたまはく、「十日十夜、六時に念をもつばらにし、五体を地に投げてかの仏を禮敬し、堅固正念にしてことごとく散乱を除き、もしはよく心に念じ、念々に絶えずは、十日のうちにならずかの阿弥陀仏を見たてまつることを得、ならびに十方世界の如来および所住の処を見たてまつらん。ただ重障・鈍根の人をば除く。いまの少時において觀たてまつることあたはざるところなり。一切のもるもの善をみなことごとく回向して、安樂世界に往生することを得んと願せば、終らんとする日に、阿弥陀仏、もろもろの大衆とその人の前に現じて、安驗し稱善したまはん。この人、すなはちの時にはなほだ慶悦をなさん。この因縁をもつて、その所願のごとく、すなはち往生することを得ん」と。『平等覺經』⁽¹⁵⁾にのたまはく、「仏のたまはく、へかならずまきに齋戒して、一心清淨にして昼夜につねに念じ、無量清淨の國に生れんと欲ひて、十日十夜、断絶せざるべし。われ、みなこれを慈愍して、ことごとく無量清淨の國に生ぜしめん」と乃至、一日一夜もまたかくのごとし。あるいは、この文をもつて下の諸行門のなかに置くべし。『双卷經』の偈⁽¹⁶⁾にのたまはく、

「その仏の本願力ありて、名を聞きて往生せんと欲へば、
みなことごとくかの國に到りて、おのづから不退轉に致る」と。

『觀經』の上品上生の人⁽¹⁷⁾は、命終の時に臨みて、掌を合せ手を又へて「南無阿弥陀仏」と称すれば、仏の名を称するがゆゑに、五十億劫の生死の罪を除き、化仏の後に從ひて、宝池のなかに生る。同じき品の中生の人⁽¹⁸⁾は、命終の時に臨みて、地獄の猛火一時にともに至らんに、弥陀仏の十力威徳⁽¹⁹⁾、光明神力、戒・定・慧・解脱・知見⁽²⁰⁾を聞けば、八十億劫の生死の罪を除き、地獄の猛火、化して清涼の風となりて、もろもろの天の華を吹く。華の上にみな化仏・菩薩ましまして、この人を迎接して、すなはち往生することを得しめたまふ。同じき品の下生の人⁽²¹⁾は、命終の時に臨みて、苦に逼められて仏を念することあたはず。

善友の教に隨ひて、ただ心を至して声をして絶えざらしめ、十念を具足して「南無量壽仏」と称すれば、仏の名を称するがゆゑに、念々のうちに八十億劫の生死の罪を除き、一念のあひだのごとくにすなはち往生することを得。『双卷經』⁽²²⁾に、かの仏の本願にのたまはく、「諸仏の世界の衆生の類、わが名字を聞きて、菩薩の無生法忍、もろもろの深総持を得ずといはば、正覚を取らじ」と。〔他方の國土のもろもろの菩薩衆、わが名字を聞きて、すなはち不退轉に至ることを得ずといはば、正覚を取らじ〕と。『觀經』⁽²³⁾にのたまはく、「もし仏を念するものは、まさに知るべし、この人はこれ人中の分陀利華なり。觀世音菩薩・大勢至菩薩、その勝友とならん。まさに道場に坐し、諸仏の家に生るべし」と以上、釋衆の勝利なり。余は上の別時念仏門⁽²⁴⁾のごとし。

- (1) 『觀經』の像觀 、『觀無量壽經』(『大正藏』一一、三四三頁中)。
- (2) また 『觀無量壽經』(『大正藏』一一、三四六頁中)。
- (3) また 『觀無量壽經』(『大正藏』一一、三四四頁中)。
- (4) 『阿弥陀思惟經』 『陀羅尼集經』卷二、阿弥陀仏大思惟經說序分(『大正藏』一八、八〇頁中)。
- (5) 苾芻 比丘 (Dharmya 出家の仏弟子) の異訳。
- (6) 『稱讚淨土經』 『稱讚淨土經』(『大正藏』一一、三五二頁上)。
- (7) 『觀經』 『觀無量壽經』(『大正藏』一一、三四三頁中)。
- (8) また 『觀無量壽經』(『大正藏』一一、三四四頁中)。
- (9) 『十往生經』 『十往生阿弥陀仏國經』(『統藏』一・八七、二九二丁下左二九三丁右上)。ただし『大正藏』第八五卷所収の敦煌本 (S.2586) 『山海慧菩薩經』(首題新加) により良く一致する(『大正藏』八五、一四〇九頁中)。
- (10) 唐土の諸師 道綽『安樂集』卷下(『大正藏』四七、二頁下)、善導『觀念法門』(『大正藏』四七、二五頁中)、善導『往生禮讚』(『大正藏』四七、四四七頁下)、懷感『群疑論』卷四(『大正藏』四七、五四頁中)等。
- (11) 『双卷經』 『無量壽經』卷上(『大正藏』一一、二六八頁下二六九頁上)。
- (12) 『大集經』の『賢護分』 『大方等大集經賢護分』卷一(『大正藏』一三、八七五頁下)。
- (13) 『觀經』 『觀無量壽經』(『大正藏』一一、三四三頁下)。
- (14) 『鼓音声王經』 『阿弥陀鼓音声王陀羅尼經』(『大正藏』一一、三五二頁下)。
- (15) 『平等覺經』 『無量清淨平等覺經』卷三(『大正藏』一一、二九三頁上)。

- (16) 『双卷経』の偈 『無量寿経』卷下(『大正蔵』一一二、二七三頁上)。
 (17) 『観経』の上品上生の人 『観無量寿経』(『大正蔵』一一二、三四五頁下)。
 (18) 同じき品の中生の人 『観無量寿経』(『大正蔵』一一二、三四六頁上)。
 (19) 十力威徳 仏がそなえる十種の智力。本講読(三)四七頁(16)参照。
 (20) 戒・定・慧・解脱・知見 「戒律をたもつこと・禪定に入ること・智慧を完成すること・あらゆる煩惱から解放されること・自身が悟ったことを自覚すること」という、仏に備わる五つの功徳。あわせて五分法身と言う。
 (21) 同じき品の下生の人 『観無量寿経』(『大正蔵』一一二、三四六頁上)。
 (22) 『双卷経』 『無量寿経』卷上(『大正蔵』一一二、二六八頁下、二六九頁中)。
 (23) 『観経』 『観無量寿経』(『大正蔵』一一二、三四六頁中)。
 (24) 別時念仏門 大文第六「別時念仏」第一「尋常別行」の項に、『観念法門』所引の『般舟三昧経』に見仏・滅罪・護念の益、迦才『浄土論』に往生の益等が挙げられている。続いて『鼓音声王経』『平等覚経』に言及し、「次の利益門に至りてまぎに知るべし」と述べている。本講読(十)二八二九頁。

【現代語訳】

第五に、阿弥陀仏独自の利益について。

行者の心を揺るぎなきものとするために特に項目を改めて明らかにする前項までと同様「罪を滅ぼして善を生ずること」「人知れず神仏が護ってくださること」「この身のままで仏を見ること」「来世に勝れた利益を受けること」の順に示す。

『観無量寿経』に像想観―阿弥陀・観音・勢至の像を対象とする観想―を説いて、「この観想をなす者は、何億劫ものあいだ迷いの世界に繋ぎとめられるほどの罪を取り除かれ、その身のままで念仏三昧を完成するだろう」と言う。同じ経に、「ただ阿弥陀仏と観音・勢至二菩薩の名を聞くだけで、無量劫のあいだ迷いの世界に繋ぎとめられるほどの罪を取り除かれる。まして心を傾けて観念する者はなおさらである」と言う。

また同じ経に、「ただ仏像を観念するだけでも無量の福徳が得られるのだ。まして仏に備わる身体的特徴をすべて観念する者はなおさらである」と言う。

『陀羅尼集経』阿弥陀思惟経に、次のように言う。「世界を支配する大王が、何億年もかけて世界中の宝物を集めて十方の諸仏に布施しようとも、出家の修行者や在家の信者たちが、ほんのしばらくでも坐禅し、自他平等の慈愛の心をもってあらゆる人々を思いやりながら阿弥陀仏を念ずる功徳には及ばない」と以上は罪を滅ぼして善を生ずること。

『称讚浄土経』に、「善男善女が、極楽世界の清らかで厳かな情景を見て、ここに生まれたいという願いを発すならば、それがいつのことであっても、その願いは、あらゆる世界の無数の諸仏方が聞きいれてくださるだろう。仏の教えに随う者は、みな必ず悟りに向かって退くことはなく、阿弥陀仏の極楽世界に往生することができるだろう」と言う。

『観無量寿経』に、「阿弥陀仏の白毫より放たれる光明は、あらゆる世界の仏を念ずる人々を照らし出し、救いの手の中におさめ取って決して捨てられない」と言う。

同じ経に、「阿弥陀仏が無数の化身を遣わして、観音・勢至二菩薩とともに、常に念仏の行者のところにやってくる」と言う。

『十往生経』に、釈尊が阿弥陀仏の功徳や極楽国土の莊嚴を説いた後、「善男善女が、この経を読誦し、弘め、敬い、誦らず、信じ、供養を捧げるならば、その信じ敬う心に対して、私は今より常にかの二十五菩薩を遣わして彼らを護らせよう。彼らが病に苦しみ、悩みに沈むことのないように、悪魔に狙われ、悩まされ、付け入られることのないようにしよう」と以上、さらには寝ても覚めても、日常生活の全体を安らかにしてやろうというのである。

中国の諸師はみな、「二十五菩薩は、阿弥陀仏を念じて往生を願う人を護ってください」と言う。『十往生経』の教説と同様である二十五の菩薩とは、観世音菩薩・大勢至菩薩・藥上菩薩・普賢菩薩・法自在菩薩・師子吼菩薩・陀羅尼菩薩・虚空藏菩薩・徳藏菩薩・宝藏菩薩・金藏菩薩・金剛藏菩薩・光明王菩薩・山海慧菩薩・華嚴王菩薩・衆宝王菩薩・月光王菩薩・日照王菩薩・三昧王菩薩・定自在王菩薩・大自在王菩薩・白象王菩薩・大威徳王菩薩・無辺身菩薩を言ふ。

『無量寿経』の第三十七願に、「あらゆる世界の神々や人々が、私の名を聞いて、全身を地面に投げ出して最敬礼し、信を得て歓喜にあふれ、菩薩の実践を行うならば、すべての神々や人々から敬われるであろう。それができないならば、私は仏の座に就かない」と以上は人知れず神仏が護ってくださること。

『大集護経』に、「善男善女が、姿勢を正し、心を一点に集中して、阿弥陀仏を観念し、その身体的特徴や威嚴に満ちた様子、説法の会座にあつまつた人々を正しく観じ、説法の内容を正しく把握して、教えの通りに心を傾け、いつまでも心を乱さないように注意して一日一夜を過ごし、そのまま七日七夜に至るまで、教えの通りに観念するならば、この人は必ず阿弥陀仏を見ることができるよう。昼間に見ることができなくても、夜には、あるいは夢の中で、阿弥陀仏は必ず現れてくださるだろう」と言う。

『観無量寿経』に、「阿弥陀仏の眉間の白毫を観する者には、八万四千の相好

がおのずと見えるようになってくるだろう。阿弥陀仏を見る者には、あらゆる仏を見ることができる。あらゆる仏を見ることできれば、諸仏は行者の目の前に立ち、悟りの印可を授けてくれるだろう。これを仏の相好をすべて観ずる法と言う」と以上は仏を見ること。

『鼓音声王経』に、「十日のあいだ毎日六度、心を傾け全身を地面に投げ出して仏を礼拝し、心を正しく保って乱れをなくし、あるいは心に仏を念じ続ければ、十日のうちに必ず阿弥陀仏を見ることができ、さらにはあらゆる世界の仏とその浄土を見ることができよう。ただし重い罪をもつ者と、素質のない者とは除く。彼らは今すぐには見られないが、今までのすべての善をかき集めて極楽に往生したいと願えば、臨終の日、阿弥陀仏は聖衆とともに彼の前に現れ、彼をなぐさめ、善行を誉めるだろう。その時彼は大きな喜びにつつまれる。このようないきさつで、彼は願いの通り、即座に往生することができよう」と言う。

『平等覚経』には、「釈尊がおっしゃた。へ必ず生活規範を守って、心を清らかにして昼夜つねに仏を念じ、極楽に生まれたいと願って、十日十夜の間途切れることがないようにせよ。慈悲の心をもって、残らず極楽に往生させよう」と言う一日一夜に至るまで同じ利益が得られる。この文は、大文第九「諸行往生」の章に挙げてみよう。

『無量寿経』の偈に次のように歌われている。

「弥陀本願力のはたらきで
みな極楽におさめ取られて
名を聞き往生願うひと
二度と退くことはない」と。

『観無量寿経』下品上生の人は、臨終の時、合掌して「南無仏」と称えれば、仏の名を称えたために五十億劫のあいだ迷いの世界に繋ぎとめられるほどの罪を取り除かれ、化仏の後について極楽の池に生まれる。下品中生の人は、臨終の時、地獄の火が押しよせるが、阿弥陀仏の不可思議の力、光明の威力、悟りに備わる様々なたらきの事を聞くことを得て、八十億劫のあいだ迷いの世界に繋ぎとめられるほどの罪を取り除かれ、地獄の火が消えて清らかな風が吹き、天より花が舞い散る。その花の上に化仏・菩薩がいて、彼を迎え取り、即座に往生することができる。下品下生の人は、臨終の時、苦しみのために仏を念ずることもできないが、良き師の教えに随い、ただ心を傾けて声を限りに十遍「南無阿弥陀仏」と称えれば、仏の名を称えたことよって、一遍ごとに八十億劫のあいだ迷いの世界に繋ぎとめられるほどの罪を取り除かれ、即座に往生することができる。

『無量寿経』の第三十四・四十七願には、次のように誓われている。「あらゆる仏の世界の人々が私の名を聞き、空を悟って心が安定し、深い悟りの智慧を得る、ということが実現しないなら、私は仏の座に就かない」。「他の仏国の菩薩方

が、私の名を聞き、即座に不退転の位に至る、ということが実現しないなら、私は仏の座に就かない」と。

『観無量寿経』には、「仏を念ずる者は、白蓮華のような人だと理解できよう。観音菩薩・勢至菩薩が善き友となろう。かれらは仏の説法の会座に列し、仏の浄土に生まれるであろう」と以上は来世に勝れた利益を受けることの文証である。このほかに別時念仏の章に挙げた文証がある。



第六に引例勸信といふは、『観仏経』の第三⁽¹⁾に、仏、もろもろの釈子に告げてのたまはく、「毘婆尸⁽²⁾の像法のうちに一の長者ありき、名づけて月徳といひき。五百の子ありき、同じく重き病に遇へり。父、子の前に致りて涕涙し合掌して、もろもろの子に語りていはく、へなんぢら、邪見にして正法を信ぜず。いま無常の刀、なんぢが身を截り切むとも、なんの怖むところありとかせん。仏世尊まします、毘婆尸と名づく。なんぢ、仏を称すべし」と。もろもろの子聞きをはりて、その父を敬ふがゆゑに「南無仏」と称しき。父また告げていはく、へなんぢ、法を称すべし、なんぢ、僧を称すべし」と。いまだ三たび称するに及ばずして、その子命終しき。仏を称せしをもつてのゆゑに四天王の所に生れき。天上の寿尽きて、前の邪見の業をもつて大地獄に墮ちき。獄率羅刹、熱鉄の扱をもつてその眼を刺し壊りき。この苦を受けし時に、父の長者の教誨せしところの事を憶して、仏を念せしをもつてのゆゑに、還りて人中に生じき。尸棄⁽³⁾仏の出でたまへりしに、ただ仏の名を聞きて、仏の形を親⁽⁴⁾たてまつらざりき。乃至、迦葉⁽⁵⁾仏の時にもまたその名を聞きき。六仏の名を聞きし因縁をもつてのゆゑに、われと同じく生ぜり。このもろもろの比丘、前世の時に、悪心をもつてのゆゑに仏の正法を謗せしも、ただ父のためのゆゑに「南無仏」と称せしをもつて、生々につねに諸仏の名を聞くことを得、乃至、今世にわが出でたるに値遇して、もろもろの障除⁽⁶⁾ころがゆゑに阿羅漢となれり」と。また⁽⁷⁾のたまはく、「燃灯⁽⁸⁾仏⁽⁹⁾の末法のうちに一の羅漢ありき。その千の弟子、羅漢の説を聞きて、心に瞋恨を生じき。寿の修短に随ひておのおの命終せんと欲せしに、羅漢、教へて「南無諸仏」と称せしめき。すでに仏を称しをはりて忉利天に生ずることを得てき。乃至、未来世にまさに仏に作ることを得べし、南無光照と号せん」と。第七卷⁽¹⁰⁾に、文殊みづ

から説けり、過去の宝威徳仏に値遇し礼拝せしことを。「その時に、釈迦文仏讃じてのたまはく、善きかな、善きかな。文殊師利、すなはち昔の時に一たび仏を礼せしがゆゑに、そこはくの無数の諸仏に値ふことを得てき。いかにいはんや、未來にわがもろもろの弟子の、勤めて仏を觀するものをや」と。仏、阿難に勸したまはく、へんぢ、文殊師利の語を持ちて、あまねく大衆および未來世の衆生に告げよ。もしはよく礼拝するもの、もしはよく仏を念ずるもの、もしはよく仏を觀するもの、まさに知るべし、この人は、文殊師利と等しくして異なることあることなからん。身を捨てて、他世に、文殊師利等のもろもろの大菩薩、その和上となりたまはん」と。また⑤のたまはく、「時に、十方の仏、來りて跏趺して坐したまへり。東方の善徳仏、大衆に告げてのたまはく、へわれ、過去の無量世の時を念へば、仏の、世に出でたまへることありき。宝威徳上王仏と号しき。時に比丘ありき。九弟子と仏塔に往詣して、仏像を礼拝しき。一の宝像の殿頭に於て觀じつべきを見て、礼しをはりて、あきらかに視て、偈を説きて讚嘆しき。後の時に命終して、ことごとく東方の宝威徳上王仏の國に生れて、大蓮華のなかに結跏趺坐して、忽然として化生しき。これより以後、つねに仏に値ふことを得、諸仏の所にして淨く梵行を修し、念仏三昧を得てき。三昧を得をはりしかば、仏のために授記したまひき。《十方の面におのの仏になることを得ん》と。東方の善徳仏はすなはちわが身これなり。東南方の無憂徳仏、南方の栴檀徳仏、西南方の宝施仏、西方の無量明仏、西北方の華徳仏、北方の相徳仏、東北方の三乘行仏、上方の広衆徳仏、下方の明德仏、かくのごとき十仏は、過去に塔を礼し、像を觀じ、一偈をもつて讚嘆せるによりて、いま十方にしておのの仏になることを得たるなり」と。この語を説きはりて、釈迦文仏を問訊したまふ。すでに問訊をはりて、大光明を放ちて、おのの本国に還りたまひぬ」と。また⑦のたまはく、「四仏世尊、空より下りて釈迦文仏の床に坐して、讚じてのたまはく、善きかな、善きかな。すなはちよく未來の時の濁惡の衆生のために、三世の仏の白毫の光明を説きて、もろもろの衆生をして罪咎を滅することを得しめたまふ。所以はいかん。われ昔曾をおもんみれば、空王仏の所にして出家して道を學しき。時に四の比丘あり。ともに同学となりて、仏の正法を習ひき。煩惱、心を覆ひて、堅く仏法の宝蔵を持つことあたはず、不善の業多くして、まさに惡道に墮つべし。空中に声ありて、比丘に語りていはく、《空王如来はまた涅槃したまひにき。なんぢが所犯を救ふものなしと謂へりといへども、なんぢら、いま塔に入りて像を觀ずべし。仏の在世と等しくして異なることなからん》と。われ、空の聲に従ひて塔に入り、像の眉間の白毫を觀じて、すなはちこの念をなさく、《如来の在世

の光明・色身は、これとなんぞ異ならん。仏の大人相、願はくはわが罪を除きたまへ》と。この語をなしをはりて、大山の崩るるがごとくにして五体を地に投げ、もろもろの罪を懺悔しき。これより以後、八十億阿僧祇劫に惡道に墮ちず、生々につねに十方の諸仏を見たてまつり、諸仏の所に於て甚深の念仏三昧を受持しき。三昧を得をはりて、諸仏現前して、われに記別を授けたまひき。東方の妙喜國の阿閼仏は、すなはち第一の比丘これなり。南方の歡喜國の宝相仏は、すなはち第二の比丘これなり。西方の極樂國の無量壽佛は、第三の比丘これなり。北方の蓮華莊嚴國の微妙声佛は、第四の比丘これなり」と。時に、四の如来おのおの右の手を申べて、阿難が頂を摩で、告げてのたまはく、へんぢ、仏語を持ちて、広く未來のもろもろの衆生のために説け」と。三たびこれを説きはりて、おのの光明を放ちて、本国に還歸したまひにき」と。また⑧のたまはく、「財首菩薩、仏にまうしてまうさく、へ世尊、われ過去の無量世の時を念へば、仏世尊ましましき、また釈迦牟尼と名づけたてまつりき。かの仏の滅後に一の王子ありき、名づけて金幢といひき。憍慢・邪見にして正法を信ぜざりき。知識の比丘ありき、定自在と名づくるもの、王子に告げていはく、《世に仏像まします、衆宝をもつて嚴飾せり。しばらく塔に入りて、仏の形像を觀ずべし》と。時にかの王子、善友の語に隨ひて、塔に入りて像を觀じき。像の相好を見て、比丘にまうさく、《仏像の端嚴なること、なほかくのごとし。いはんや仏の眞身をや》と。比丘、告げていはく、《へんぢ、いま像を見るに、礼することあたはずは、まさに、南無仏》と稱すべし。この時に、王子、合掌し恭敬して、南無仏》と稱しき。宮に還りて、念を繋けて塔のなかの像を念ずるに、すなはち後夜に夢に仏像を見き。仏像を見しがゆゑに、心大きに歡喜し、邪見を捨離して、三宝に帰依しき。壽命終るに隨ひて、前に塔に入りて、南無仏》と稱せし因縁の功德によりて、九百万億那由他の仏に値ひて、甚深の念仏三昧を逮得せり。三昧力のゆゑに、諸仏現前して、それがために記を授けたまひき。これよりこのかた百万阿僧祇劫、惡道に墮せざりき。乃至今日、甚深の首楞嚴三昧を獲得せり。その時の王子は、いまのわれ、財首これなり」と。また⑨のたまはく、「仏のたまはく、へわれ、賢劫のもろもろの菩薩と、曾、過去の栴檀窟の所に於て、この諸仏の色身・變化の觀仏三昧海を聞けり。この因縁の功德力をもつてのゆゑに、九百万億阿僧祇劫の生死の罪を超越して、この賢劫にして次第に仏になる乃至かくのごとく、十方の無量の諸仏もみなこの法によりて三菩提を成じたまふ」と。『迦葉經』⑩のたまはく、「昔、過去久遠の阿僧祇劫に、仏、世に出でたまへることありき。号して光明とまうしき。入涅槃の後に、一の菩薩ありき。大精進と名づけき。年

はじめて十六にして、婆羅門種なり。端正なること比ひなし。一の比丘ありて、白暈の上に仏の形像を画きて、持ちて精進に与へき。精進、像を見て、心大に歡喜して、かくのごとき言をなさく、「如来の形像すら妙好なること、なほしかり。いはんやまた仏の身をや。願はくは、われ、未来にまたかくのごとき妙身を成就することを得ん」と。いひをはりて思念すらく、「われもし家にあらば、この身は得ること回し」と。すなはち父母にまうして、哀れみを求め、出家せんとせしに、父母答へていはく、「われいま年老いたり、ただなんち一子あるのみ。なんちもし出家しなば、われらまさに死ぬべし」と。子、父母にまうさく、「もしわれを聴したまはずは、われ今日より飲せじ、食せじ、床座に昇らじ、また言説せじ」と。この誓をなしをはりて、一日食せずして、すなはち六日に至る。父母・知識・八万四千のもろもの嫁女等、同時に悲泣して、大精進を礼して、尋いで出家を聴しき。すでに出家することを得、像を持って山に入り、草を取りて座となし、画像の前にありて結跏趺坐し、一心にあきらかに觀ぜり。「この画像は如来に異ならず。像は覺にあらす、知にあらす。一切の諸法もまたかくのごとし。相なく、相を離れたり。体性空寂なり」と。この觀をなしをはりて日夜を経て、五通を成就し、無量を具足し、無礙弁を得、普光三昧を得て、大光明を具せり。淨天眼をもつて東方の阿僧祇の仏を見たてまつり、淨天耳をもつて仏の説を聞きて、ことごとくよく聴受しき。七月を満足するまで、智をもつて食となしき。一切の諸天、華を散じて供養しき。山より出でて村落に來至して、人のために法を説くに、二万の衆生、菩提心を発し、無量阿僧祇の人は、声聞・緣覺の功德に住し、父母・親眷もみな、不退の無上菩提に住しき。仏、迦葉に告げたまはく、「昔の大精進は、いまのわが身これなり。この像を觀せしによりて、いま仏になることを得たり。もし人ありて、よくかくのごとき觀を學せば、未来にかならずまさに無上道を成すべし」と。『譬喻經』の第二にのたまはく、「昔、比丘ありき。その母を度せんと欲せしに、母すでに命過しぬ。すなはち道眼をもつて天上・人中・擒狩・薜荔のなかに求索するに、つひにこれを見ず。泥梨を觀ずるに、母がなかにあるを見て、すなはち懊惋し悲哀して、広く方便を求めて、その苦を脱せんと欲ひき。時に边境に王ありき。父を害して國を奪ひてき。比丘、この王の命、余り七日ありて、罪を受ける地は、比丘の母と同じく一処にあらんと知りて、夜の安靖の時に、王の寝れる処に到りて、壁を穿ちて半身を現す。王、怖ちて刀を抜きて頭を斫る。頭すなはち地に落ちぬれども、その処は故のごとし。これを斫ること數反するに、化の頭、地に滿つれども、比丘は動かす。王、意にすなはち解りて、その非常なることを知りぬ。頭を叩きて過を謝す。比丘のいはく、

く、「恐ることなかれ、怖つることなかれ。あひ度せんと欲するのみ。なんち、父を害して國を奪へりやいなや」と。對へていはく、「実にしかり。願はくは慈悲せられよ」と。比丘のいはく、「大功德をなすとも、おそらくはあひ及ばざらんか。王、まさに南無仏と稱すべし。七日絶えずは、すなはち罪を免るることを得てん」と。かさねて、これに告げていはく、「つつしみてこの法を忘るることなかれ」と。すなはち飛びて去りぬ。王すなはち手を叉へて一心に「南無仏」と稱すること、昼夜に懈らず、七日ありて命終して、魂神、泥梨の門に向かひて「南無仏」と稱す。泥梨のなかの人、仏といふ音声を聞きて、みな一時に「南無仏」といひしかば、泥梨すなはち冷めにき。比丘、ために法を説きしかば、比丘の母、王、および泥梨のなかの人、みな度脱を得き。後に大に精進して、須陀洹道を得き」と以上諸文、略して抄す。『優婆塞戒經』にのたまはく、「善男子、われ本往、邪見の家に墮ちたりき、惑網おのづからわれを蓋へり。われ、その時に名を弘利といへり。妻は名女にして、精進勇猛し度脱すること無量にして、十善をもつて化導しき。われその時に、心に殺戮をなしき。酒肉を貪嗜し、懶惰懈怠にして、精進することあたはざりき。妻時にわれに語らばく、「その獵殺を止め、戒めて酒肉を断ち、つとめて精進を加へて、地獄の苦惱の患ひを脱して、天宮に上生して、一処に与することを得よ」と。われその時においても殺心止まず、酒肉の美味をも割捨することあたはず、精進の心も懶惰にして前まず、天宮は意みを息め、地獄の分を受けたり。われその時に聚落のうちに居し、僧伽藍に近くして、しばしば鐘を槌つを聞きき。妻われに語りていはく、「事々あたはずは、健鐘の声を聞くと、三たび彈指して一たび仏を稱せよ。身を斂めてみづから恭まり、慚慢を生ずることなかれ。その夜半のごときも、この法廢することなかれ」と。われすなはちこれを用ゐて、また捨失することなかりき。十二年を経て、その妻命終して、切利天に生れき。かへりて後三年ありて、われまた壽盡きて、断事に經至せしに、われを判じて罪に入れて、地獄の門に向かへき。門に入る時に當りて、鐘の三声を声きしに、われすなはち住立して、心に歡喜をなし、愛樂して厭はず。法のごとく三たび彈指して、長き声をもつて仏を唱へき。声ごとくみな慈悲ありて、梵音朗らかに徹れりき。主事、聞きをはりて、心はなだ愧感すらく、「これ真の菩薩なりけり。いかに錯りて判ぜる」と。すなはち遣追・還送して、天上に往かしめき。すでに往き、到りをはりて、五体を地に投げて、わが妻を礼敬して、まうさく、「大師、幸ひにして大恩を養ひて、いま濟拔せらる。すなはち菩提に至るまで教勅に違はじ」と以上。また震旦には、東晋よりこのかた唐朝に至るまで、阿弥陀仏を念じて淨土に往生せるもの、道俗・

男女、合せて五十余人なり。僧二十三人、尼六人、沙弥二人、在家男女合せて二十四人。『浄土論』ならびに『瑞応伝』⁽¹³⁾に出でたり。わが朝に往生せるもの、またその数あり。つぶさには慶氏の『日本往生の記』にあり。いかにいはんや、朝市にありて徳を隠し、山林に名を逃れたるもの、独り修して独り去る、たれか知ることを得んや。

問ふ。下下品の人と五百の釈子とは、臨終に同じく念じたるに、昇沈なんぞ別なる。答ふ。『群疑論』⁽¹⁴⁾に会しては、「五百の釈子は、ただ父が教によりて一たび仏を念せしかども、しかも菩提心を発し浄土に生ることを求めて、懇勤に慚愧せざりき。またかれは心を至さず、またただ一念にして十念を具せざるがゆゑなり」と略抄。

(1) 『観仏経』の第三 『観仏三昧海経』卷三(『大正蔵』一五、六六〇頁中〜六六一頁上) 略抄。

(2) 毘婆尸仏 過去七仏の第一。七仏とは、釈迦牟尼仏とそれ以前に出現した六仏(毘婆尸仏 Vipāśyin、尸棄仏 Śikhin、毘舍浮仏 Viśvabhu、拘留孫仏 Krakucchanda、拘那含牟尼仏 Kanakamuni、迦葉仏 Kaśyapa)を言う。本文中に登場する子らは、毘婆尸仏・尸棄仏から迦葉仏に至る六仏の名を聞いて、今生に釈迦牟尼仏の弟子になったという。

(3) また 『観仏三昧海経』卷三(『大正蔵』一五、六六一頁上〜中) 取意略抄。

(4) 燃灯仏 (Dīpaṅkara) 釈尊が過去世に師事し、成仏の印可を授かったという仏。錠光仏とも訳される。

(5) 第七卷 実は第九卷。『観仏三昧海経』卷九(『大正蔵』一五、六八八頁中)。

(6) また 『観仏三昧海経』卷九(『大正蔵』一五、六八八頁中〜下)。

(7) また 『観仏三昧海経』卷九(『大正蔵』一五、六八八頁上〜六八九頁上)。

(8) また 『観仏三昧海経』卷九(『大正蔵』一五、六八九頁上〜中)。

(9) また 『観仏三昧海経』卷九(『大正蔵』一五、六八九頁中〜下)。

(10) 『迦葉経』 『大宝積経』卷八十九、摩訶迦葉会(『大正蔵』一一、五二二頁下〜五二四頁上) 取意略抄。本項こまでの引用文は、道世『諸経要集』卷一(『大正蔵』五四、一頁下〜二頁下)の引文に一致する。

(11) 『譬喻経』の第二 未詳。『経律異相』卷十八(『大正蔵』五三、九七頁中)、『法苑珠林』卷十三(『大正蔵』五三、三八一頁下)等に類似の文がある。

(12) 『優婆塞戒経』 現行本『優婆塞戒経』に見えない。慧沼『勸発菩提心集』

卷中(『大正蔵』四五、三九一頁中〜下)に、同様の引用がある。

(13) 十善 在家信者の守るべき規範。不殺生・不偷盗・不邪淫・不妄語・不両舌・不悪口・不綺語・不貪欲・不瞋恚・不邪見を言う。

(14) 『浄土論』ならびに『瑞応伝』 迦才『浄土論』卷下(『大正蔵』四七、九七頁上〜一〇〇頁上)、文諡・少康『往生西方浄土瑞応刪伝』(『大正蔵』五一、一〇四頁上〜一〇八頁上)。

【現代語訳】

第六に、聖教の証文を列挙して信を勧めめる。

『観仏三昧海経』卷三に、釈尊が多くのお弟子に次のようにおっしゃっている。「毘婆尸仏の入滅から五百年を経たのち、一人の長者がいた。名を月徳と言った。五百人の子があったが、みな同時に重病にかかった。父は子らの前で涙を流して合掌し、こう言った。「お前たちはみな間違った考えを持ち、仏の正しい教えを聞きいれようとしなかった。今お前たちの身に死が差し迫っているのに、心の拠り所は何もなからう。仏がまします。毘婆尸仏と申し上げる。お前たち、この仏に對し『南無仏』と称えよ」と。その言葉を聞いた子らは、父に對する尊敬の念によって、『南無仏』と称えた。父は続いて、『南無法』『南無僧』と称えよ」と教えたが、三度も称えるいとまなく、子らは亡くなった。彼らは『南無仏』と称えたために四天王天に生まれたが、天の寿命尽きた後、前世の間違った考えの報いで大地獄に墮ちた。地獄の鬼が、焼けた鉄の刺股で眼球をえぐった。その苦しみを受けた時、父の教えを思い出して仏を念じたために、今度は人間世界に生まれた。その時、尸棄仏がいらっしやうが、だた仏の名を聞いただけで、姿を見ることはなかった。その後、迦葉仏の時代に至るまで、同じように仏の名を聞くことができた。彼らは六仏の名を聞いた因縁によって、私と共にこの世に生まれることになった。彼らは仏弟子となった。前世には、邪心をもって佛法を誹つたけれども、ただ父のおかげで『南無仏』と称えたために、生まれるたびに諸仏の名を聞くことができた。やがて今生には私に出会い、多くの罪が取り除かれたために、阿羅漢の悟りを得ることができたのだ」と。

同じ経に、『燃灯仏が入滅されて千五百年を経たのち、一人の阿羅漢がいた。彼には千人の弟子がいたが、彼の説法を聞いて心に怒り怨みを生じた。しかし、それぞれが寿命を終える際、阿羅漢が教えて『南無諸仏』と称えさせたため、切利天に生まれることができた。やがて後の世には仏となり、『南無光照』と名乗

ることができるだろう」と言う。

同じ経の巻七に、文殊菩薩がむかし宝威徳仏に出会い礼拝したことを告げる場面がある。そこには次のように説かれている。「その時積尊は文殊を讃えて、へすばらしいことだ、文殊師利よ。お前は昔、一度だけ仏を礼拝したために、無数の諸仏に出会うことができたのだ。まして一所懸命に仏を観念する我が弟子たちの将来は、さらにすばらしいものとなるだろう」とおっしゃった。積尊は阿難に命じて次のようにおっしゃった。〈お前は文殊師利の言葉をよく覚えて、現在未来のすべての人々に伝えよ。仏を礼拝することのできる者、仏を念ずることのできる者、仏を観ずることのできる者は、文殊師利と何ら異なることがない。いつの世にか出家することがあれば、その時には文殊師利をはじめ多くの菩薩方が、その師となるであろう〉と。

また同じ経に、「十方諸仏が集り同席した際、東方世界の善徳仏が皆に次のように言った。〈久遠の過去世に、仏が出現されたことがあった。名を宝威徳上王仏と申し上げる。その時一人の修行僧が、九人の弟子とともに仏塔に参詣し、仏像の数々に礼拝を捧げた。その中に特に厳かで観想に適した像があったので、礼拝の後よく観念し、偈を作つて誉め讃えた。彼らは命終つた後、そろつて東方宝威徳上王仏の浄土に生まれることができた。大きな蓮華の中に結跏趺坐してたちまち浄土に生まれ、以後常に仏に親しくまみえることができ、諸仏のもとで清らかな修行をし、念仏三昧を成就することができた。三昧を成就した際、仏が成仏の印可を授けて下さり、《十人が十方の浄土においてそれぞれ仏となることができるだろう》とおっしゃった。東方の善徳仏は今の私である。東南方の無憂徳仏、南方の梅檀徳仏、西南方の宝施仏、西方の無量明仏、西北方の華徳仏、北方の相徳仏、東北方の三乗行仏、上方の広衆徳仏、下方の明徳仏をあわせて十仏は、過去世において仏塔を礼拝し、仏像を観念し、偈を作つて仏を誉め讃えたことによつて、現在十方世界においてそれぞれ仏となることができたのだ」と。このことを告げた後、善徳仏等の諸仏は、釈迦牟尼仏に挨拶をし、やがて大光明を放つてそれぞれ本国に帰られた」と言う。

また同じ経に、「四人の仏が虚空より下りて釈迦牟尼仏のそばに坐り、讃えて言った。〈すばらしいことだ。あなたは未来の穢れた世界の人々のために、過去・現在・未来の諸仏の白毫より放たれる光明のいわれを説いて、多くの人の罪を取り除こうとしていらっしゃる。それがなぜすばらしいかと言うと、私は昔、空王仏のところへ出家し、仏道を学んだ。その際、四人の修行僧と共に、仏の正しい教えを学んでいた。煩惱が心を覆つて、しっかりと仏法を修得することができず、

悪い行いが多くて悪道に墮ちようとしていた。その時虚空に声が響いて、修行僧たちに告げた。《空王如来は入滅された。お前たちの罪を救うお方はもういらっしやらないけれども、仏塔に入って仏像を観ぜよ。仏のいらっしゃる時と何ら異なることのない福德が得られるだろう》と。私はその声に導かれて仏塔に入り、仏像の眉間の白毫を観じて、こう念じた。《如来が世にましました際の光明や身体は、この尊像と何ら異なることがありません。仏相好のはたらきによつて、なにとぞ私の罪を取り除いて下さい》と。そう言い終わると、山が崩れるように全身を地面に投げ出し、多くの罪を告白して許しを請うた。その後八十億阿僧祇劫のあいだ悪道に墮ちず、どこに生まれても常に十方諸仏を見、諸仏のもとで念仏三昧の奥義を教わつた。三昧が成就すると、諸仏は目の当たりに現れて、私に成仏の印可を授けられた。東方妙喜国の阿閼仏がその第一の修行僧である。南方欽喜国の宝相仏が第二、西方極楽国の無量寿仏が第三、北方蓮華莊嚴国の微妙声仏が第四の修行僧である」と。その時、四人の如来がそれぞれ右手を伸ばし、阿難の頭頂を撫でて、〈この話をよく憶えて、未来世の多くの人々に説いてくれ〉と告げられた。同じ言葉を三度くりかえした後、光明を放つてそれぞれの本国に帰られた」と言う。

また同じ経に、「財首菩薩が積尊にこう言われた。〈世尊よ、久遠の昔を回想しますに、仏世尊がいらっしゃつて、やはり名を釈迦牟尼とおっしゃいました。入滅された後、金幢という名の王子がいました。増長して間違つた考えを振りかざし、仏の正しい教えに従おうとしませんでした。定自在という名の師僧が、王子に、《世間に仏像というものがあります。たくさんのお宝で飾られたものです。少しでも仏塔に参られ、仏像を観じなさいませ》と告げました。王子は師の言葉に随つて仏塔に入り仏像を観じました。像に表された相好を見て、師僧に、《仏像でさえこれほど厳かなのだから、真の仏はなおさらでしょうね》と言いました。師僧が、《あなたは今仏像をご覧になつただけで、礼拝はなさらなかつた。どうか南無仏と称えて下さい》と言うと、王子は合掌し敬いの心を捧げて、南無仏と称えました。王宮に帰り、心を傾けて仏塔の中の仏像のことを考えていると、夜明けに仏像の夢を見ました。仏像を見たために心に大きな喜びを生じ、間違つた考えを捨てて、仏教に帰依しました。命の終わる時、以前仏塔に入って南無仏と称えた功德により、九百万億那由他の仏に出会つて、念仏三昧の奥義を修得し、三昧の力によつて諸仏が目の当たりに現れ、成仏の印可を授けられました。その後、今に至るまで百万阿僧祇劫の間、悪道に墮ちることはありませんでした。現在首楞嚴三昧の奥義を修得しています。その時の王子が私、財首です」と言う。

また同じ経に、「釈尊がおっしゃった。〈私は昔、現在世の多くの菩薩方と共に、栴檀窟仏のもとで、諸仏やその変化身の姿を観念する三昧の法を学んだ。その功徳によって、九百万億阿僧祇劫のあいだ迷いの世界に繋ぎとめられるほどの罪を取り除かれ、現在世に仏となった。そのように、十方の諸仏方もみなこの三昧の功徳によって悟りを完成されたのである〉」と言う。

『大宝積経』摩訶迦葉会に、「久遠の昔、光明という名の仏が世に出られた。その入滅の後、大精進という名の菩薩がいた。十六歳で、バラモンの出身だった。容姿端麗この上なかった。一人の修行僧が白いキャンパスに仏像を描き、大精進に与えた。大精進はおおいに喜び、こう言った。〈絵像でさえ、これほどすばらしいのだから、真の仏はなおさらでしょう。将来は私もこのようにすばらしい姿になりたいと思います〉と。そして、〈家庭にあってはこのような姿にはなれまい〉と思ひ、父母に出家に同意してほしいと願ったところ、父母は、〈我々は年老いた。おまえ一人が頼りだ。出家などされたら死んでしまう〉と言う。彼は父母に、〈もしお許しただけでないなら、今日から飲食を絶ち、ベッドで寝ることも話をすることもしません〉と言ひ、その誓い通りに断食して六日間が過ぎた。父母や友人、多くの侍女は共に悲しんで大精進のもとに集まり、やがて出家は許された。出家の後、仏の絵像を持って山に入り、草を敷いて座とし、絵像の前で結跏趺坐して心を傾けて観念した。〈この絵像は如来と何ら異なるらない。絵像は立体的な存在として手にとることができない。あらゆるものもこれと同じく、固定的な形はなく、形としてとらえることができない。本来空であり、認識できないものなのである〉と観じた。その観を成就して一昼夜を経、神通力を得て、利他慈悲の心・説法能力・三昧力を完成し、大いなる光明を放つようになった。天眼によって東方の無数の仏を見、天耳によって仏の説法を聞いてすべて理解した。七箇月間、智慧を食とした。すべての神々が花を捧げて敬いを表した。山を下りて村に来て、人々に説法すると、二万人が菩提心を発し、無量の人が声聞・縁覚の功徳を得、父母親戚もみな将来の悟りを約束された。釈尊が迦葉菩薩に告げられた。〈昔の大精進菩薩は私だ。仏像を観念したことによって、仏となることができた。この観念を学ぶ者は、将来必ず仏の悟りを完成するであろう〉」と言う。

『譬喻経』の第二に、「昔、一人の修行僧がいた。母を救おうと思ったが、母はすでに亡くなっていた。そこで神通力によって天上界・人間界・畜生界・餓鬼界を探し求めたが、どこにもいなかった。地獄を観念すると、そこに母がいるのがわかった。苦しみ悩み悲んで、何とか方法を見つけて、その苦しみの世界から

救出したいと思った。その時辺境に王がいた。父を殺して国を奪った王であった。修行僧は、この王の命があと七日で終わり、罪の報いで母と同じ地獄に墮ちることを知り、夜の静寂の中、王の寝所に忍び込み、壁に穴をあけて半身を壁から出した。王は恐怖のために刀を抜き、修行僧の首をはねた。首はそのまま地面に墮ちたけれども、同体には元通り首が繋がっている。それをまた切ることを数回繰り返すと、地面は墮ちた首だらけになったが、修行僧の身体はそのままであった。王はようやくその尋常ならざることを悟り、頭を地につけて過ちを詫びた。修行僧は言った。〈恐れることはない、怖がることはない。あなたを救おうとしているのです。あなたは父を殺して国を奪ったのですね〉と。王は、〈その通りです。慈悲をかけてお救いください〉と言った。修行僧は、〈どんなに大きな功徳をなさうとも、とても無理でしょう。王よ、南無仏と称えなさい。七日間続けられれば、罪を免れることができるでしょう〉と言ひ、さらに続けて、〈くれぐれもこの教えを忘れぬように〉と告げて飛び去った。王は手を合わせ、昼夜怠ることなく、心を傾けて南無仏と称えた。七日後に命終えて、王の魂は地獄の門に向かつて南無仏と称えた。地獄の中の人は、仏という声を聞き、みな声を合わせて南無仏と言ったので、地獄の炎熱がたちまち冷めた。そこで修行僧が説法をした。すると修行僧の母も、王も、地獄中の人々が、みな救われた。その後、大いに努力して、須陀洹のさとりを得たということである」と言う以上の諸文は省略して引用した。

『優婆塞戒経』に、「友よ、私は昔、間違った考えをもち、煩惱に満ちた人生を送っていた。広利という名だった。妻は立派な女性で、懸命に努力して多くの人を救い、十善を説いて人を導いていた。当時私は殺生の心をもち、酒肉を貪り、怠惰な生活をして、正しい行いに励もうなどとは思わなかった。ある時妻が私に言った。〈殺生の心をとどめ、規範を守り、酒肉を断って、正しい行いに励み、地獄に墮ちる心配をなくし、一緒に天上界に生まれましょう〉と。それでも私の殺生の心はなくならず、酒肉の美味を断ち切ることもできなかった。正しい行いに励もうとする心も、怠惰の心に遮られた。天上界に生まれることはあきらめて、地獄に行くしかないと思っていた。私はその頃、村の寺院の近くに住んでいて、鐘の音をよく聞いていた。妻は私に、〈いりんな善行ができないのなら、鐘の音を聞くたびに、三度指を鳴らし、一度仏の名を称えて下さい。身をつつしみ、うぬぼれの心をとどめて下さい。真夜中でもこのことだけはきちんとして下さい〉と言った。私はこの言葉を聞きいれて、しっかりと守った。十二年後、妻は亡くなり、切利天に生まれた。その後三年経って、私も命を終え、閻魔王の法廷に至っ

た。罪が確定して地獄の門に向かった。門に入ろうとした際、鐘の音が三つ聞えたので、私はすぐに立ち止まり、心に喜びを感じ、敬いの心をおこして、教えられた通り、三度指を鳴らして、長々と声を響かせて仏の名を称えた。その一声にはみな慈悲の心がそなわり、清らかな音が生きて響きわたった。閻魔王はその声を聞いておおいに恥じ入り、「この方は真の菩薩である。どうして間違った判決をしてしまったのだろう」と言い、鬼を遣わして呼び戻し、天上界へと送りとどけた。天上界に到着の後、全身を地に投げ出して妻を礼拝し、こう言った。「先生、おかげさまで救われました。悟りを成就するまで教えを守ります」と言う。

中国には東晋から唐に至るまで、阿弥陀仏を念じて浄土に往生した者が、道俗・男女あわせて五十人余いる。僧が二十三人、尼僧が六人、沙弥が二人、在家の男女あわせて二十四人である。迦才の『浄土論』や『往生西方浄土瑞応刪伝』に見える。日本でも往生人はたくさんいて、詳しくは慶滋保胤の『日本往生極楽記』に述べられている。さらには、町の中でひっそりと暮らし、あるいは山中に隠棲して、誰にも知られずに一人修行し一人往生した人がたくさんいることだろう。問う。『観無量寿経』の下品下生人と、『観仏三昧海経』の五百人の子と、臨終に同じように仏を念じたのに、前者は極楽に往生し、後者は生天ののち地獄に墮ちるといふ違いがあるのはなぜか。

答え。懐感『群疑論』に会通して、「五百人の子は、ただ父の教えによって一度だけ仏を念じたが、菩提心を発して浄土に往生することを願い心の底から罪を恥じることがなかった。また、誠心誠意ではなかったし、念仏も一度のみで、十念を満たさなかったからである」と言う。



第七に悪趣の利益を明かさば、『大悲経』の第二⁽¹⁾にのたまはく、「もしまた人ありて、ただ心に仏を念じて一たびも敬信^{まことしく}をなさば、われ説かく、この人はまさに涅槃の果を得て、涅槃の際を尽すべし。阿難、しばらく人中の念仏の功德をば置きて、もし畜生ありて、仏世尊においてよく念をなすものをば、われまた説かく、その善根の福報、まさに涅槃を得べし」と。

問ふ。なんらかこれなるや。答ふ。同経の第三⁽²⁾に、仏、阿難に告げたまは

く、「過去に大商主ありき。もろもろの商人を將て大海に入りしに、その船、にはかに摩竭大魚のために、来りて呑み噬らはれんとす。その時に、商主およびもろもろの商人、心驚き毛豎^{たて}ちて、おのおのみな悲しみ泣きて、嗚呼^{あゝ}す。奇^{あや}しきかな、かの閻浮提はかくのごとく楽しむべく、かくのごとく希有なり。世間の人身、かくのごとく得がたし。われいままさに父母と離別しぬ。姉妹・婦児・親戚・朋友にも別離して、われさらに見ざるべし。また仏・法・衆僧をも見たてまつることを得まじくなりぬ」と。きはめて大きに悲哭しき。その時に、商主ひとへに右の肩を祖^{あは}し、右の膝を地に着けて、船の上に住して、一心に仏を念じ、掌を合せて礼拝して、声を高くして唱へていはく、「南無諸仏、得大無畏者、大慈悲者、憐愍一切衆生者」と。かくのごとく三たび称する時に、もろもろの商人、また同時にかくのごとく三たび称しき。時に摩竭魚、仏の名号、礼拝の音声を聞きて、大愛敬をなし、聞きてすなはち口を閉ぢてき。その時に、商主およびもろもろの商人、みなことごとく安穩にして、魚の難を免るることを得てき。時に摩竭魚、仏の音声を聞きて、心に喜樂をなし、さらに余のもろもろの衆生をも食噉せざりき。これによりて命終して人中に生るることを得てき。その仏の所にして、法を聞き、出家して、善知識に近づきて、阿羅漢を得てき。阿難、なんぢ、かの魚の、畜生道に生れて、仏の名を聞くことを得、仏の名を聞きをはりて、乃至、涅槃せることを觀ぜよ。いかにいはんや、人ありて、仏の名を聞くことを得、正法を聴聞せんをや」と略す。また『菩薩処胎経』の「八畜品」⁽³⁾にのたまはく、「竜の子、金翅鳥⁽⁴⁾のために、頌を説きていはく、

身は、朝露の虫の、光を見てすなはち命終するがごとし。
戒を持ち仏語を奉ずれば、長寿天に生るることを得て、
累劫に福徳を積みて、畜生道に墮ちず。
いまの身は竜身たれども、戒徳清明にして行ず。
六畜のなかに墮せりといへども、かならずみづから済度することを望まん」と。この時に、竜の子、この頌を説く時に、竜子・竜女、心意開解して、壽終りて後に、みなまさに阿弥陀仏の国に生るべし」と以上、八齋戒の竜の子なり。余趣の、仏語を信じて浄土に生るること、これに准へよ。地獄の利益は、前の国王の因縁⁽⁵⁾、ならびに下の粗心の妙果⁽⁶⁾のごとし。諸余の利益は、下の念仏の功能⁽⁷⁾のごとし。

(1) 『大悲経』の第二 『大悲経』卷二 『大正藏』一一、九五六頁下。

- (2) 同経の第三 『大悲経』卷三(『大正藏』一一一、九五七頁中〜下) 略抄。
 (3) 『菩薩処胎経』の「八齋品」 『菩薩從兜術天降神母胎説広普経』卷七、八賢聖齋品(『大正藏』一一一、一〇五一頁上)。
 (4) 金翅鳥 八部衆の中、迦楼羅(Garuda)を指す。龍神に囚われた母を救うため神々と戦う巨鳥。龍を憎んで食べるといふ。
 (5) 前の国王の因縁 前項所引の『譬喻経』第二の文を指す。
 (6) 下の粗心の妙果 大文第十「問答料簡」の第六「粗心の妙果」の項に引用された『大悲経』の文等。
 (7) 下の念仏の功能 次章、大文第八「念仏証拠」に挙げる文を指す。

【現代語訳】

第七に、悪道に墮ちた者が受ける利益について。

『大悲経』卷二に、「心に仏を念じ、一度でも敬いの心をもってその教えを受け容れるならば、この人は、究極の悟りを完成するであろう。阿難よ、しばし人間界のことはさしおいて、畜生のことを論じたい。畜生が仏を念ずるならば、彼もまたその善なる行いの報いとして、悟りを完成するであろう」と言う。

問う。この教説のいわれはどのようなことであるのか。

答え。同じ経の卷三に、釈尊が阿難に次のようにおっしゃっている。「昔、大商人がいた。多くの商人を率いて海に出たが、船が鯨に呑み込まれそうになった。その時商人たちは、驚いて身の毛がよだち、悲しくて泣き叫んだ。(何という不条理だ。この世界は本当に楽しく、また命は本当に得難いものである。この世界に人として生まれてくることは極めて希なことなのだ。せっかく生まれてきたのに、今父母と別れなければならない。姉妹・妻子・親戚・友人とも別れて、もう会えないだろう。仏法僧を拜することもできなくなってしまった」と、大声をあげて泣いていた。その時、大商人は、衣の右肩を脱ぎ、右の膝を地に着けて、船上において、心を傾けて仏を念じ、手を合わせて礼拝し、大きな声で唱えた。南無諸仏、得大無畏者、大慈悲者、憐愍一切衆生者(畏れなき心を持ち、大いなる慈悲の心を持ち、あらゆる人々を憐れみ慈しみたまう、仏に帰依し奉る)と。大商人が三度唱えると、多くの商人たちも一緒に三度唱えた。すると鯨は、仏の名と礼拝の声を聞いて、大いに敬いの心をおこし、すぐに口を閉じた。そうして商人たちは無事鯨の難をのがれることができた。南無仏の声を聞いた鯨は、心に喜びを生じ、以後人を食うのをやめた。そのために命終えた後人間に生まれることができた。仏のもとで教えを聞き、出家して善き師に出会い、阿羅漢の悟りを

得た。阿難よ、考えてみよ。畜生道に生まれた鯨でさえも、仏の名を聞くことができ、やがて悟りを得ることができたのだ。まして人間界に生まれて、仏の名を聞くことができ、正しい教えを聴聞した者が悟りを得るのは当然であろう」と省略して引用した。

また『菩薩処胎経』八齋品に、次のように言う。「龍神の子が金翅鳥のために偈をつくり、次のように歌った。

殺生してはいけません
 われらの命は虫・朝露の
 みほとけの誠め守って
 長年かけて福を積み
 今は龍の身受けるとも
 畜生道から救われて
 自分の寿命を縮めるだけ
 光を見ては消えゆくごとし
 天上界に生まれたならば
 畜生世界に戻ることなし
 誠め守って正しく生きれば
 やがて必ず悟るだろう

と。この偈を聞いて、大勢の龍神の子女らに悟りを求める心が芽生えた。命終えた後は、みな阿弥陀仏の世界に生まれるだろう」と以上は八齋戒を守る龍神の子の話である。畜生以外の悪趣の者も、仏の教えを受け容れて浄土に生まれるということと同様である。地獄における利益は、前項に挙げた国王の話や、後の「粗心の妙果」の項を参照せよ。その他の利益は、次章を参照せよ。



大文第八に、念仏証拠といふは、問ふ、一切の善業はおの利益あり、おのの往生することを得てん。なんがゆゑぞ、ただ念仏の一門を勧むる。答ふ。いま念仏を勧むることは、これ余の種々の妙行を遮するにはあらず。ただこれ、男女・貴賤、行住坐臥を簡はず、時処諸縁を論せずして、これを修するに難からず、乃至、臨終に往生を願求するに、その便宜を得たるは念仏にはしかし。ゆゑに『木槵経』①にのたまはく、「難陀国の波瑠璃王、使ひを遣はして、仏にまうしてまうさく、へただ願はくは、世尊、ことに慈愍を垂れて、われに要法を賜ひて、われをして日夜に修行することを得やすく、未来世のうちにもの苦し苦を遠難せしめたまへ」と。仏告げてのたまはく、(大王、もし煩惱障・報障②を滅せんと欲はば、まさに木槵子③、一百八を貫きて、もつてつねにみつから随へて、もしは行、もしは坐、もしは臥に、つねにまさに心を至して分散の意なくして、

仏陀・達摩・僧伽の名を称しては、すなはち一の木櫛子を過ぐすべし。かくのごとくして、もしは十、もしは二十、もしは百、もしは千、乃至、百千万せよ。もしよく二十万遍を満てんに、身心乱れず、もろもろの詭曲けいこくなくは、命を捨てて第三の炎摩天えんまてんに生るることを得て、衣食自然にして、つねに安楽なることを受けん。もしまたよく一百万遍を満たさば、まさに百八の結業けつごふを除外することを得て、生死の流を背きて、涅槃の道に趣き、無上の果を獲べし」と略抄。いはんやまた、もろもろの聖教のなかに、多く念仏をもつて往生の業となせり。その文、はなはだ多し。略して十の文じゅうのぶんを出さん。一には、『占察經』の下巻にのたまはく、「もし人、他方の現在の淨國に生れんと欲はば、まさにかの世界の仏の名字に隨ひて、意をもつばらにして誦念すべし。一心に乱れずして上のごとく觀察せば、決定してかの仏の淨國に生るることを得、善根增長して、すみやかに不退を成せん」と「上のごとき觀察」とは、地藏菩薩の法身および諸仏の法身と、おのが自身と、平等無二にして、不生不滅なり、常樂我淨なり、功德圓滿せりと観するなり。また己身無常なること、幻のごとし、厭ふべしと観する等なり。二には、『双卷經』の三輩の業、淺深ありといへども、しかも通じてみな「一向にもつばら無量壽仏を念じたてまつれ」とのたまへり。三には、四十八願のなかに、念仏門において別に一の願を發してのたまはく、「乃至十念せん。もし生ぜずは、正覺を取らじ」と。四には、『觀經』に、「極重の悪人は、他の方便なし。ただ仏を称念して、極樂に生ずることを得」と。五には、同經にのたまはく、「もし心を至して西方に生れんと欲はば、先づまさに一の丈六の像の、池の水の上になましますと観ずべし」と。六には、同經にのたまはく、「光明あまねく十方世界の念仏の衆生を照らして、撰取して捨てたまはず」と。七には、『阿彌陀經』にのたまはく、「少善根の福德因縁をもつて、かの國に生ずることを得べからず。もし善男子・善女人ありて、阿彌陀仏を説くを聞きて、名号を執持して、もしは一日乃至もしは七日すること、一心に乱れずは、その人命終の時に臨みて、阿彌陀仏、もろもろの聖衆と現じて、その前にまします。この人終る時に、心、顛倒せずしてすなはち往生することを得ん」と。八には、『般舟經』にのたまはく、「阿彌陀仏のたまはく、へわが國に來生せんと欲はば、つねにわれを念ぜよ。しはしば、つねに念をもつばらにして休息あることなかれ。かくのごとくせば、わが國に來生することを得ん」と。九には、『鼓音聲經』にのたまはく、「もし四衆ありて、よくまさしくかの仏の名号を受持せば、この功德をもつて、終らんと欲する時に臨みて、阿彌陀、すなはち大衆とこの人の所に往きて、それをして見ることを得しめ、見をはりて尋いで生ぜん」と。十には、『往生論』に、「かの仏の依正の功德を觀念するをもつて、往生の業となせり」と

以上。このなかに、『觀經』の下下品・『阿彌陀經』・『鼓音聲經』は、ただ名号を念ずるをもつて往生の業となせり。いかにいはいはんや、相好・功德を觀念せんをや。

問ふ。余の行に、いづくぞ勸信の文なからんや。答ふ。その余の行法は、ちなみにかの法の種々の功能を明かす。そのなかにおのづから往生の事を説くなり。ただちに往生の要を弁ずるに、多く「念仏」といふがごとくにあらざ。いかにいはいはんや、仏みづからすでのたまへり、「まさにわれを念ずべし」と。また仏の光明、余の行人を撰取すといはず。これらの文、分明なり。なんぞかさねて疑をなさんや。

問ふ。諸經の所説は、機に隨ひて万品なり。なんぞ管見をもつて一の文を執せんや。答ふ。馬鳴菩薩の『大乘起信論』^⑥には、く、「また次に、衆生はじめてこの法を学せんに、その心怯弱にして、信心成就すべきこと難きことを懼畏して、意に、退しんと欲せば、まさに知るべし、如来に勝方便ましまして、信心を撰護したまふ。隨ひて心をもつばらにして仏を念ずる因縁をもつて、願に隨ひて、他方の仏土に往生することを得るなり。修多羅に説くがごとし。へもし人もつばらにして西方の阿彌陀仏を念じて、所作の善業をもつて回向して、かの世界に生れんと願求すれば、すなはち往生することを得」と以上。あきらかに知りぬ、契經に、多く念仏をもつて往生の要となせり。もししからずは、四依の菩薩^⑦はすなはち理尽にあらじ。

(1) 『木櫛經』 『木櫛子經』(『大正藏』一七、七二六頁上)。善導『觀念法門』(『大正藏』四七、三〇頁上)に引用されている。

(2) 煩惱障・報障 三障(悟りを妨げる三種の障害)の中の二つ。三障とは、煩惱障(貪欲・瞋恚・愚癡等の惑)・業障(五逆・十惡等の業)・報生(惡業の果報としての地獄・餓鬼・畜生等の苦)を言う。

(3) 木櫛子 ムクロジ(ムクロジ科の落葉高木)の種子。数珠玉に用いる。

(4) 炎摩天 夜摩天とも言う。欲界の六天(一四天王天、二切利天、三夜摩天、四兜率天、五樂變化天、六他化自在天)の第三天。

(5) 十の文 以下に挙げる十文が、懷感『群疑論』卷五(『大正藏』四七、五九頁下〜六〇頁上)の説を承けていることは、すでに良忠『往生要集義記』卷七(『浄土宗全書』一五、三三四頁下)に指摘されている。『群疑論』には、念仏往生の証拠として、次の九文が挙げられている。

1 『阿彌陀經』六方証誠の文(『大正藏』一一、三四七頁中―三四八頁上取意)

- 2 『観無量寿経』下三品の文（『大正蔵』一一二、三四五頁下―三四六頁上取意）
 - 3 『観無量寿経』撰取不捨の文（『大正蔵』一一二、三四三頁中）
 - 4 『無量寿経』卷下、三輩の文（『大正蔵』一一二、二七二頁中―下）
 - 5 『無量寿経』卷上、第十八願の文（『大正蔵』一一二、二六八頁上取意）
 - 6 『般舟三昧経』卷上あるいは『大賢賢護経』卷一、常念我名の文（『大正蔵』一三、九〇五頁中、『大正蔵』一一三、八七五頁下）
 - 7 『鼓音声経』十日念仏の文（『大正蔵』一一二、三五二頁中―下）
 - 8 『華嚴経』（六十巻本）卷七、念仏三昧の文（『大正蔵』九、四三七頁中）
 - 9 『占察経』卷下、当念名号の文（『大正蔵』一七、九〇八頁下―九〇九頁上）
- 『往生要集』はこれを受けて十文を挙げるが、その出典を一括して次に掲げよう。
- 1 『占察経』卷下、当随名号の文（『大正蔵』一七、九〇八頁下―九〇九頁上）
 - 2 『無量寿経』卷下、三輩の文（『大正蔵』一一二、二七二頁中―下）
 - 3 『無量寿経』卷上、第十八願の文（『大正蔵』一一二、二六八頁上）
 - 4 『観無量寿経』下品下生の文（『大正蔵』一一二、三四六頁上取意）
 - 5 『観無量寿経』第十三観の文（『大正蔵』一一二、三四四頁中）
 - 6 『観無量寿経』撰取不捨の文（『大正蔵』一一二、三四三頁中）
 - 7 『阿弥陀経』執持名号の文（『大正蔵』一一二、三四七頁中）
 - 8 『般舟三昧経』卷上、常念我の文（『大正蔵』一三、九〇五頁中）
 - 9 『鼓音声経』受持仏号の文（『大正蔵』一一二、三五二頁中）
 - 10 世親『浄土論』観念の文（『大正蔵』二六、一三二頁中―一三三頁中取意）
- 『群疑論』の九文から1『阿弥陀経』・8『華嚴経』を外し、5『観無量寿経』・7『阿弥陀経』・10『浄土論』を加えて十文としている。なお、『往生要集』諸本（建保版・建長版）では、『木槵経』引用文の末尾「略抄」に続いて「懷感師またこれに同じ」と付記されている。『群疑論』には『木槵経』の引用はないので、この付記は、『群疑論』にも念仏が諸行に勝ることを説く記述がある、という意味であろう。たとえば、『群疑論』卷六（『大正蔵』四七、六九頁上）には、命終時にひとえに念仏を勧める理由として、「一勝、二少、三易、四滅、五縁、六迎、七生」の七義を挙げ、また、『群疑論』卷七（『大正蔵』四七、七〇頁下）には、命終時の行として称名が実相観に勝る理由を、「一人悪、二法深、三苦逼、四時促」の四義に約して論じている。これらも、上掲『群疑論』巻五の記述とともに、『往生要集』に示唆を与えたものと考えてよからう。

(6) 馬鳴菩薩の『大乘起信論』 『大乘起信論』（『大正蔵』三二、五八三頁上

略抄）。

(7) 四依の菩薩 人々の拠り所となる四種類の菩薩。1凡夫位の菩薩、2十住位の菩薩、3十行・十回向位の菩薩、4十地・等覺位の菩薩を言う。ここでは馬鳴菩薩を指している。

【現代語訳】

大文第八念仏証拠 ―「念仏が往生の業となる証拠」を示す章―。

問う。すべての善業にはそれぞれ利益があって、その一つひとつが往生の因となる。なのになぜ、ただ念仏の法門だけを勧めるのか。

答え。念仏を勧めることが、他のすばらしい修行を排除することにはならない。ただ念仏は、男も女も、貴族も庶民も区別することなく、寝ても起きても、どこにいて何をしようとも、容易に行うことができ、また、臨終の時に往生を願うには、最も適した行いだからである。

よって『木槵子経』には次のように説かれている。「難陀国の波瑠璃王が釈尊のもとに使者をつかわして申し上げた。〈世尊よ、どうかお願いいたします。私に慈しみと憐れみの心をかけて、肝要の教えをお授けください。私が日夜行い易く、将来苦しみを脱することができませう〉と。仏はおっしゃった。〈大王よ、煩惱や悪道の障りを取り除こうと思えば、ムクロジの種子百八個に糸を通し、常に身につけ、寝ても覚めても常に誠の心を傾けて、仏・法・僧の名を称えるたびに数珠玉を一つずつ繰ってその数を数えなさい。それを十度、二十度、百度、千度、億度とくり返すのです。二十万遍に達して、身心の乱れなく、いつわりの心が起こらなければ、命終えて後、欲界の第三夜摩天に生まれることができ、衣食に事欠かず、常に穏やかな心でいられるでしょう。さらに百万遍に達すれば、百八の煩惱を断ち切り、生死の世界を離れて、悟りを目指す者となり、やがて無上の悟りを獲得できるでしょう〉と。

さらに多くの聖教に、念仏が往生の因業であることが説かれている。極めて多いので、略して十文だけを挙げよう。

第一に、『占察善悪業報経』に言う。「現在諸仏の浄土に生まれたいと思う者は、その世界の仏の名前を、心を傾けて念じ唱えよ。心に微塵の乱れもなく、教えた通りに観念すれば、かならずその仏の浄土に生まれ、善行の功德が増大し、仏の悟りに向かって退くことなく邁進する菩薩の境地に達するであろう」と「教えた通りに観念する」とは、地藏菩薩の真実の身体や諸仏の真実の身体が、自分の身体と等しく何ら変わらないものであり、生じたり滅したりすることなく、常に真如の姿をあらわし、あらゆる功德を備えている、と観念

することである。また、自分の身体は、常に移りかわる幻のようなものであり、厭うべきものである、と観念することなどである。

第二に、『無量寿経』巻下に、「三輩往生人の行業を説く中、浅深はあるがすべてに共通して、「ただひたすら無量寿仏を念じなさい」と言う。

第三に、『無量寿経』巻上、四十八願の中に、念仏の法門について特別の願を一つ発して、「ほんの十念でもしてくれたなら、必ず往生させよう。それができないなら私は仏の座につかない」と言う。

第四に、『観無量寿経』に、「極悪人にはほかに救われる道はない。ただ仏を念じて名を称えることによってのみ、極楽に往生することができるのである」と言う。

第五に、『観無量寿経』に、「心の底から西方極楽に生まれたいと思えば、まず一丈六尺の仏像が、池の水の上に乗ります、と観念せよ」と言う。

第六に、『観無量寿経』に、「阿弥陀仏の眉間白毫より放たれた光が、十方世界の念仏する人々を照らし出し、救いの手の中におさめ取って、決して捨てられない」と言う。

第七に、『阿弥陀経』に、「小さな善行によって極楽に往生することはできない。善男善女が、阿弥陀仏の教えを聞き、その名をしっかり心に刻んで、一日二日から七日の間、心を乱すことがなければ、その人の命終わる時、阿弥陀仏と多くの菩薩方が現れて眼前に立たれるだろう。そのおかげで彼は臨終の時に心が動転することなく、円滑に往生することができるだろう」と言う。

第八に、『般舟三昧経』に、「阿弥陀仏がおっしゃった。へわが国に往生したいと思えば、常に私を念せよ。心を一つに集中して途絶えることがないようにせよ。そうすればわが国に往生することができる」と言う。

第九に、『鼓音声王経』に、「出家の行者も在家の信者も、阿弥陀仏の名を心に刻み保つならば、その善行の成果として、臨終の時、阿弥陀仏と諸菩薩方が彼のところにおもむき、その姿を見せたのち、すみやかに極楽に往生させるであらう」と言う。

第十に、世親の『浄土論』に、「阿弥陀仏の姿や極楽の情景に現れた仏の功徳を観念することを、往生の因とするのである」と言う。

これらの中、第四『観無量寿経』下品下生の文、第七『阿弥陀経』、第九『鼓音声王経』の文には、ただ名号を念ずるだけで往生の因となると言う。まして仏の相好や功徳を観念するものはなおさらである。

問う。念仏以外の修行については、どうして信を勧める文が示されていないの

か。

答え。念仏以外の修行については、それぞれの修行のさまざまな効果を挙げる中に、ついでに往生のことを説いているだけである。ただ往生のためにどんな修行が必要かということだけを述べる際に、多くの経論が、「それは念仏である」と言うのとは異なる。まして釈尊はみずから、「私を念じなさい」とおっしゃった。また仏の光明は、念仏以外の修行をする人を救いの手の中におさめ取るとは言われていない。これらの文の意図は明白である。なぜこの上に疑いを重ねるのか。

問う。経典は、聞く人の能力に応じて千差万別の説き方がなされている。なぜ狭い見識によって、念仏を説く文にのみ固執するのか。

答え。馬鳴菩薩の『大乘起信論』には、次のように述べられている。「また次に、初めてこの信心成就の法を学ぶ者の中には、意志が薄弱であるために、信心を成就し難いと恐れをいだき、修行をやめてしまおうとする者もあらう。そのような者は、如来が勝れた方法を駆使して行者の信心を護って下さる、ということをお教えてやろう。如来の教えに随い、心を一点に集中して仏を念ずることによって、願い通りに仏の世界に往生することができるのである。経典に、へひたすら西方極楽の阿弥陀仏を念じ、今までの善をすべてかき集めて極楽に往生したいと願えば、ただちに往生することができる」と説かれている通りである」と。多くの経典に、念仏を往生の肝要とする教えが示されていることがわかるだろう。そうでなければ、馬鳴菩薩の説が理不尽なものとならう。



大文第九に、往生諸行を明かさば、いはく、極楽を求むるものは、かならずしももつばら仏を念せず。すべからく余の行を明かしておのおのの業欲ごうよくに任すべし。これにまた二あり。初めには、別して諸経の文を明かす。次には、総じて諸業を結す。

【現代語訳】
大文第九往生諸行 ―「念仏以外のさまざまな往生行」を示す章―。
往生極楽を願う者は念仏だけを行わねばならない、というわけではない。そこ

で念仏以外の諸行も紹介して、自由に取捨選択してもらおうと思う。

二節に分ける。初めに諸行を説く経の文を個々に列挙し、次に諸行を総括する。



第一に諸経を明かすといふは、『四十華嚴經』の普賢願^①、『三千仏名經』
『無子宝篋經』^②、『法華經』等の諸大乘經、『隨求』^③、『尊勝』^④、『無垢淨光』^⑤、

『如意輪』^⑥、『阿嚧力迦』^⑦、『不空羂索』^⑧、『光明』^⑨、『阿弥陀』^⑩、および龍樹の
所感の往生淨土等の呪なり。これらの顕密の諸大乘のなかに、みな受持・誦誦等
をもつて、往生極楽の業となせり。『大阿弥陀經』^⑪にのたまはく、「まさに齋戒
し、一心清淨にして、昼夜にまさに念じて阿弥陀仏の国に生れんと欲すべし。十
日十夜、断絶せずは、われみなこれを慈愍してことごとく阿弥陀仏の国に往生せ
しめん。たとひしかするにあたはずは、みづから思惟し、よく校計せよ。身を度
脱せんと欲するものは、まさに念を絶つべからず。愛を去りて、家事を念ふこと
なかれ。婦女と床を同じくすることなかれ。みづから身心を端く正しくして、愛
欲を断じて、一心に齋戒清淨にして、至專に阿弥陀仏国に生れんと念じて、一日
一夜、断絶せずは、寿終してみなその国に往生して、七宝の浴池の蓮華のなかに
ありて化生せん」と。この『經』は持戒をもつて首となせり。『十往生弥陀仏國
經』^⑫にのたまはく、「われいま、なんぢがために説く、十の往生あり。いかな
るか十の往生。一には身を觀じて正念にして、つねに歎喜を懷きて、飲食・衣服
をもつて仏および僧に施せば、阿弥陀仏の国に往生す。二には正念にして、世の
妙良薬をもつて一の病比丘および一切衆生に施せば、阿弥陀仏の国に往生す。三
には正念にして、一の生命をも害せず、一切を慈悲すれば、阿弥陀仏の国に往生
す。四には正念にして、師の所に從ひて戒を受け、淨慧をもつて梵行を修し、心
につねに喜びを懷けば、阿弥陀仏の国に往生す。五には正念にして、父母に孝順
し師長を敬重し、憍慢の心を懷かざれば、阿弥陀仏の国に往生す。六には正念に
して、僧房に往詣し塔寺に恭敬し、法を聞いて一の義をも解れば、阿弥陀仏の国
に往生す。七には正念にして、一日一宿のうちに八戒齋を受持し、一日一宿のう
ちに受持して一も破らざれば、阿弥陀仏の国に往生す。八には正念にして、もし
よく齋月・齋日^⑬のうちに房舎を遠離してつねに善師に詣れば、阿弥陀仏の国
に往生す。九には正念にして、つねによく淨戒を持ち、勤修して禪定を染み、法

を護り悪口せず、もしよくかくのごとく行ずれば、阿弥陀仏の国に往生す。十に
は正念にして、もし無上道において誹謗の心を起さず、精進して淨戒を持ちて、
また無智のものを教へてこの経法を流布し、無量の衆を教化す。かくのごときも
ろもろの人等、ことごとくみな阿弥陀仏の国に往生することを得」と以上、『弥勒
問經』^⑭にのたまはく、「仏の説きたまへるところのごとく、阿弥陀仏の功德利
益を願じて、もしよく十念相續して、不断に仏を念ずるものは、すなはち往生す
ことを得。まさにいかに念ずべし。仏のたまはく、へおほよそ十の念あり。
なんならをか十となす。一には、もろもろの衆生において、つねに慈心を生じてそ
の行を毀らざること、もしその行を毀ればつひに往生せず。二には、もろもろの
衆生において、つねに悲心を起して残害の意を除くこと、三には、護法心を發し
て身命を惜しまざること、一切の法において誹謗をなさざること、四には、忍辱
のなかにいて決定心を生ずること、五には、深心清淨にして利養に染せざること、
六には、一切智の心を發して日々につねに念じて、廢忘あることなきこと、
七には、もろもろの衆生において、尊重の心を起し、我慢の心を除き、謙下して
言説すること、八には、世の談話において味着をなさざること、九には、覺意に
近づき、深く種々の善根の因縁を起し、憒亂・散亂の心を遠離すること、十には、
正念にして仏を觀じて諸想を除去することなり」と。『宝積經』の第九十二に、
仏またこの十心をもつて弥勒の問に答へたまへり。そのなかの第六の心にははく、
「仏の種智を求めて、一切の時において忘失する心なし」と。その余の九種は、
文少し異なりといへども、意は前の『經』に同じ。ただ『經』の文にのたまはく、
「もし人、この十種の心のうちにおいて、隨ひて一心を成じて、かの仏の世界に
往生せんと樂欲せんに、もし生ずることを得ずといはば、この処あることなから
ん」と云々。明らか、かならずしも十を具して往生の業となすにはあらざるなり。
『觀經』^⑮にのたまはく、「かの国に生れんと欲せば、まさに三福を修すべし。
一には父母に孝養し、師長に奉事し、慈心をもつて殺せず、十善業^⑯を修する
こと、二には三帰^⑰を受持し、衆戒^⑱を具足し、威儀を犯せざること、三には
菩提心を發し、深く因果を信じ、大乘を誦誦し、行者を勸進することなり。かく
のごとき三事を名づけて淨業となす。仏、菩提希に告げたまはく、へなんぢいま
知るやいなや。この三種の業は、過去・未來・現在の三世の諸仏の淨業の正因な
り」と。また^⑲のたまはく、「上品上生といふは、もし衆生ありて、かの国に
生せんと願せば、三種の心を發して即便往生す。なんらをか三となす。一には至
誠心、二には深心、三には回向發願心なり」^⑳。三心を具せるものはかならずか
の国に生る。また三種の衆生ありて、まさに往生することを得べし。なんらをか

三となす。一には慈心にして殺せず、もろもろの戒行を具すること、二には大方等經典を誦誦すること、三には六念^⑫を修行して、回向発願してかの国に生れんと願することなり。この功德を具すること、一日乃至七日にして、すなはち往生することを得。上品中生といふは、かならずしも大方等經典を受持せざれども、よく義趣を解りて、第一義において心驚動せず、深く因果を信じ大乘を誦せず。この功德をもつて、回向して極楽国に生れんと願求するなり。上品下生といふは、また因果を信じ大乘を誦せず。ただ無上道の心を発して、この功德をもつて、回向して極楽に生れんと願求するなり。中品上生といふは、もし衆生ありて、五戒を受持し、八戒齋を持ち、もろもろの戒を修行して五逆を造らず、もろもろの過患なからん。この善根をもつて、回向して願求するなり。中品中生といふは、もし衆生ありて、もしいは一日一夜八戒齋を受け、もしいは一日一夜沙弥戒を持ち、一日一夜具足戒を持ち、威儀欠ることなし。この功德をもつて、回向して願求するなり。中品下生といふは、もし善男子・善女人ありて、父母に孝養し、世の仁慈を行ずるなり。下品上生といふは、あるいは衆生ありて、もろもろの悪業を作らん。大方等經典を誦誦せずといへども、かくのごとき愚人、多くもろもろの悪法を造りて慚愧あることなからん。終りに臨みて十二部經の首題の名字を聞き、および合掌して「南無阿彌陀佛」と称するなり。下品中生といふは、あるいは衆生ありて、五戒・八戒および具足戒を毀犯せらん。かくのごとき愚人、命終らんと欲する時に、地獄の衆火、一時にともに至らん。善知識の、大慈悲をもつて、ために阿彌陀佛の十力威徳^⑬を説き、広くかの仏の光明神力を説き、また戒・定・慧・解脱・知見^⑭を讚するに遇はん。この人聞きをはりて八十億劫の生死の罪を除くなり。下品下生といふは、あるいは衆生ありて、不善業たる五逆・十悪を作り、もろもろの不善を具せん。かくのごとき愚人、悪業をもつてのゆゑに惡道に墮つべからん。命終の時に臨みて、善知識に遇ひて、仏を念することあたはずといへども、ただ心を至して声をして絶えざらしめて、十念を具足して「南無無量壽佛」と称せん。仏の名を称せんがゆゑに、念々のうちに八十億劫の生死の罪を除くなり」と、『双卷經』の三輩の業^⑮もまたこれを出でず。『觀經』には、十六觀をもつて往生の因となせり。『宝積經』^⑯に説かく、仏前の蓮華に化生するに、四の因縁ありと。偈にのたまはく、

「華香をもつて仏および支提に散ずると、他を害せざると、ならびに像を造ると、

大菩提において深く信解するとは、蓮華に処して仏前に生るることを得」

と以上。

余は繁く出さず。

(1) 『四十華嚴經』の普賢願 四十卷本『華嚴經』卷四十(『大正藏』一〇、八四六頁下)、普賢菩薩十大願を説く中に、この願を受持誦すれば阿彌陀佛の極樂世界に往生することができる。これを含めて、以下『三千仏名經』『無字寶篋經』『法華經』や、『隨求』『尊勝』『無垢淨光』『如意輪』『不空羂索』『光明』『阿彌陀』の呪については、すでに大文第三「極樂証擲」に列挙されている。本講説(三)七〇頁参照。「極樂証擲」になく、本章に挙げられている、『阿嚩力迦』の呪は、『阿嚩多羅陀羅尼阿嚩力經』(『大正藏』二〇、二八頁中)等に、真言受持によって阿彌陀佛を見る、等の記述がある。また、「龍樹の所感の往生淨土等の呪」は、『抜一切業障根本得生淨土神呪』(『大正藏』一一、三五二頁下)を指す。これには、呪の流伝について述べた「阿彌陀經不思議神力伝」という一文が添えられているが、そこに、龍樹が安養を願生して夢にこの呪を感じたことを伝えた記述がある(同、三五二頁上)。同様の記事が、宗暁(一一五―一二一四)編『樂邦文類』卷一(『大正藏』四七、一六三頁上)に見える。

(2) 『大阿彌陀經』 『大阿彌陀經』卷下(『大正藏』一一、三二一頁上中)。(3) 『十往生阿彌陀佛國經』 『十往生阿彌陀佛國經』(『統藏』一・八七、二九二丁右下く左上)。「山海慧菩薩經」(S. 988)首題新加、「大正藏」八五、一四〇九頁中)にもほぼ一致する。

(4) 齋月・齋日 「齋月」は年に三度、正月・五月・九月の前半十五日間に八戒齋を守ること、指し、「齋日」は、月に六度、八・十四・十五・二十三・二十九・三十日に八戒齋を守ること、指す。

(5) 『弥勒問經』 現存しないが、次に源信が指摘する『大宝積經』卷九十二發勝志樂会(『大正藏』一一、五二八頁中下)に類似の記述がある。このことはすでに、伝元暁『遊心安樂道』(『大正藏』四七、一一四頁下)に指摘されている。また『弥勒問經』は、隋・唐・新羅の典籍中に頻出し、迦才『淨土論』卷中(『大正藏』四七、九二頁下)、龍興『觀經記』卷下(古逸、『安養集』所引)、元暁『無量壽經宗要』(『大正藏』三七、一二九頁上)、懷感『群疑論』卷五(『大正藏』四七、六一頁上)、新羅義寂『無量壽經述義記』卷中(古逸、『安養集』所引)、憬興『無量壽經連義述文贊』卷中(『大正藏』三七、一五二頁上)、伝基『西方要決』(『大正藏』四七、一〇五頁上)等に引用される。日本では、智光『無量壽經論釈』卷三(古逸、『安養集』所引)、良源『九品往生義』(『仏全』二四、二四四頁上)、千觀『十願発心記』(古逸、佐藤哲英『叡山淨土教の研究』資料編二〇三

頁)等に見える。

(6) 『観経』 『観無量寿経』(『大正蔵』一一、三四一頁下)。

(7) 十善業 在家信者のなすべき十種の善行。不殺生・不偷盜・不邪婬・不妄語・不両舌・不悪口・不綺語・不貪欲・不瞋恚・不邪見を言う。

(8) 三帰 仏・法・僧の三宝に帰依すること。すべての仏教徒が守るべき根本の規範であるので、三帰戒とも言う。

(9) 衆戒 在家の五戒(不殺生・不偷盜・不邪婬・不妄語・不飲酒)や、在家信者が六齋日を守る八戒齋(不殺生・不偷盜・不婬・不妄語・不飲酒・不香油塗身・不歌舞観聽・不高广大床・不非時食戒)、在家の十善戒(不殺生・不偷盜・不邪婬・不妄語・不綺語・不悪口・不両舌・不貪欲・不瞋恚・不邪見)等を指す。広い意味では出家の具足戒なども含まれる。

(10) また 『観無量寿経』(『大正蔵』一一、三四四頁下)三四六頁上、三輩往生段全体の要約。

(11) 一には至誠心、二には深心、三には回向発願心なり 『観無量寿経』の三心と言う。「至誠心」は、真実の心、嘘・偽りの無い心。「深心」は、深い信心、疑いの無い心。「回向発願心」は、すべての善行を結果して極楽への往生を願う心。

(12) 六念 「仏・法・僧・戒・施・天」を念ずること。仏・法・僧の三宝を念じ、五戒を守り、修行僧や教団に財物を施し、天上界に生まれることを願うという、在家信者の実践を指す。

(13) 十力威徳 仏がそなえる十種の智力。本講読(三)四七頁(16)参照。

(14) 戒・定・慧・解脱・知見 五分法身。前章四〇頁(20)参照。

(15) 『双巻経』の三輩の業 『無量寿経』巻下(『大正蔵』一一、二七二頁中)下。

(16) 『宝積経』 『大宝積経』卷九八(『大正蔵』一一、五四八頁上)。

【現代語訳】

第一に、諸行を説く経を列挙する。四十巻本『華嚴経』の普賢菩薩の十大願、『三千仏名経』『無字宝篋经』『法華経』等の大乗經典や、『随求』『尊勝』『無垢浄光』『如意輪』『阿嚧力迦』『不空羼索』『光明』『阿弥陀』の呪、それに龍樹が感得した往生浄土の呪などである。これら顕密大乘の聖教に、経や呪の文を心に保持し、読み唱えることが、往生極楽のための行いとなると説かれている。

『大阿弥陀経』に、「仏教徒としての生活規範を守り、ひたすら身心を清浄に

保ち、昼も夜も阿弥陀仏の国に生まれたいと願い続けよ。十日間、昼夜途絶えることなく念じ続けければ、私は慈悲の心をおこし、お前たちすべてを阿弥陀仏の国に往生させよう。もしそれができなくても、自分でよく考えて、あれこれ実践してみればよい。迷いの世界から脱け出したいと思うならば、その思いはけっして途絶えさせてはならない。家族への愛着を捨て、家庭のことは考えるな。妻と一緒に寝てはならない。身心共に自ら厳しく律し、愛欲の心を捨て、ひたすら規範を守って清らかな生活をし、心を傾けてひたすら阿弥陀仏の国に生まれたいと思いつけて、一昼夜途絶えることがなければ、命を終えた後みなともに阿弥陀仏の国に往生し、宝玉を散りばめた池に咲く蓮華の中に生まれることができるだろう」と言うこの経は規範を守ること第一としている。

『十往生阿弥陀仏国経』に、「今お前たちに説き示しておきたい。十種の往生の方法がある。どのようなものかと言うと、第一に、私の姿を観念して心を正し、常に喜びの心を懐きながら、飲食・衣服を仏や教団に施すならば、阿弥陀仏の国に往生することができる。第二に、正しい心で、すぐれた業を病気の修行僧あるいはあらゆる人々に施すならば、阿弥陀仏の国に往生することができる。第三に、正しい心で、けっして殺生をせず、すべての生き物に慈愛の心を注ぐならば、阿弥陀仏の国に往生することができる。第四に、正しい心で、師に仕え戒を受け、清らかな智慧によって清らかな修行をし、常に喜びの心を懐くならば、阿弥陀仏の国に往生することができる。第五に、正しい心で、父母に孝行し、師や先輩を敬い、人を見下すような心を持たなければ、阿弥陀仏の国に往生することができる。第六に、正しい心で、寺院を訪ねて本尊を敬い、仏法を聞いて少しでも理解するならば、阿弥陀仏の国に往生することができる。第七に、正しい心で、一昼夜のあいだ八戒齋を守り、一つも破ることがなければ、阿弥陀仏の国に往生することができる。第八に、正しい心で、年に三箇月の齋月、月に六日の齋日に、自宅を離れて師に仕えるならば、阿弥陀仏の国に往生することができる。第九に、正しい心で、常に規範を守って清らかな生活をし、精神統一の境地を目指して修行に励み、仏の教えに順って言葉を慎む等のことを実践するならば、阿弥陀仏の国に往生することができる。第十に、正しい心で、仏の無上の悟りを仰いで誹謗の心を起こさず、努力して規範を守り、また無知の者に教えを伝えて仏法の流布に努め、多くの人々を導く等のことを実践する人はみな、阿弥陀仏の国に往生することができる」と言う。

『弥勒問経』に、「釈尊の教説に順い、阿弥陀仏の救いを願って、もし十念のあいだ途絶えることなく、仏を念じ続ける者は、即座に極楽に往生することができる

きる。どのように念ずればよいかと言うと、釈尊は次のようにおっしゃる。〈だいたい次の十種の心である。どのようなものかと言うと、第一に、あらゆる人々に対して常に慈愛の心を懐き、その言動を損なわれないこと。もし損なえなければ往生できない。第二に、あらゆる人々に対して憐れみの心を懐き、残忍な心を起さないこと。第三に、命をかけて仏法を護ろうと心に決め、すべての教えを誇らないこと。第四に、いかなる困難にも耐え忍び、信念を曲げないこと。第五に、清らかな心を貫いて、物欲に惑わされないこと。第六に、利害を離れた平等の智慧をおこし、それを日々に留めて忘れないこと。第七に、あらゆる人々に対して尊敬の念を懐いて、慢心を起さず、謙虚に話すこと。第八に、世間話に熱中しないこと。第九に、悟りを目指して、ひたすら善行を積み重ね、心が乱れ騒がぬよう注意すること。第十に、心を傾けて仏を観念し、それ以外の想念を起さないこと〉と云う。

『大宝積経』卷九十二でも、釈尊が弥勒の問いに答えて、同じような十種の心を挙げてゐる。その第六の心に、「仏と同じ平等の智慧の獲得を目指して、どんな時も忘れないこと」と言う。これ以外の九種の心は、多少の文字の違いはあるが、前掲『弥勒問経』の文と同意である。ただし『大宝積経』には続いて、「以上十種の心の中どれか一つを起こして、極楽に往生したいと願う者が、もし往生できないならば、この教説は無意味なものとなろう」と説かれている。よって往生のためには、十種の心すべてが揃う必要はない、ということとは明白である。

『観無量寿経』に、「極楽に往生したいと思うならば、三つの善行を実践せよ。第一に、父母に孝行し、師や先輩によく仕え、慈愛の心をもって殺生せず、十種の善行をなすこと。第二に、三帰依を守り、定められた規範を守り、言動を慎むこと。第三に、菩提心を発し、深く因果の道理を信じ、大乘経典を読み唱え、人に仏道修行を勧めることである。これら三つを清らかな実践と名づける。釈尊が韋提希におっしゃった。〈この三つの行いが、過去・現在・未来のあらゆる仏たちの成仏の直接の因であることを知っているか〉と。

また同じ経に、「上品上生とは、極楽に往生したいと願ひ、三種の心を起こし、すみやかに往生を遂げる人と言う。三種の心とは、第一に至誠心、第二に深心、第三に回向発願心である。この三種の心をすべて起こした者は、必ず極楽に往生することができる。また三種の行いをなす者は、必ず極楽に往生することができる。その三種とは、第一に、慈愛の心をもって殺生せず、種々の規範を守ること。第二に、大乘経典を読み唱えること。第三に、「仏・法・僧・戒・施・天」を念じ、すべての善行を結果して極楽に往生したいと願うことである。これらの善行

をすべて実践して一日から七日間を過ごせば、すみやかに往生することができる。

上品中生とは、大乘経典を読み唱えることはできなくとも、よくその意味を理解し、正しい教えをしっかりと受け止めて心揺らぐことなく、深く因果の道理を信じて大乘の教えを誇ることがない人と言う。これらの善行の成果を結果して極楽に生まれたいと願う者である。上品下生とは、因果の道理を信じて大乘の教えを誇らず、最高の悟りを目指す心を発し、その善行の成果を結果して極楽に生まれたいと願う者である。中品上生とは、五戒・八戒齋等、種々の規範を守って、五逆の罪を作らず、種々の過ちを犯さない等の善行の成果を結果して往生を願う者である。中品中生とは、一昼夜だけ八戒齋を受け、あるいは一昼夜だけ沙弥戒または具足戒を守って全く間違いを犯さない、という善行の成果を結果して往生を願う者である。中品下生とは、父母に孝行し、世間の慈善を行う善男善女である。下品上生とは、種々の悪を行つた者である。大乘経典を誇ることはないまでも、種々の悪をたくさん重ねて恥ずかしいとも思わなかったが、臨終の時に、仏教経典の題名を聞き、手を合わせて〈南無阿彌陀仏〉と称えた者である。下品中生とは、五戒・八戒や具足戒を破つた者である。このような愚か者の臨終の時には、地獄の猛火が一举に押しよせるが、善き師が現れて慈悲の心を発し、彼のために阿彌陀仏の不可思議の力、光明の威力を教え、悟りに備わる様々なはたらきを讃える説法をしてくれる。彼はその教えを聞いて、八十億劫のあいだ迷いの世界に繋ぎとめられるほどの罪を取り除かれるのである。下品下生とは、五逆・十悪をはじめ悪の限りを尽くしたために、悪道に墮ちるべきところ、臨終の時に善き師に遇い、仏を観念することができなくとも、ただ心を傾けて声を限りに〈南無阿彌陀仏〉と十遍称えることができた者である。仏の名を称えたために、その一声ごとに、八十億劫のあいだ迷いの世界に繋ぎとめられるほどの罪を取り除かれるのである」と云う。

『無量寿経』に説かれる三輩往生人の行業も、ほぼ同様である。

『観無量寿経』には、十六種の観念を往生の因とする。

『大宝積経』には、仏前の蓮華の中に生まれるためには、四つのことを行えと言ひ、次のように歌っている。

「ほとけや寺に花香を供え ひとにやさしくふるまつて

ほとけの像を造りつつ 悟りを深く信ずれば

蓮のつぼみにつつまれて ほとけの前に生まれなん」と。このほ

かは煩雑なので提示しない。

第二に総じて諸業を結すといふは、慧遠法師^(一)、浄土の因要を出せるに、四あり。「一には観を修して往生すること、十六観のごときなり。二には業を修して往生すること、三福業のごときなり。三には心を修して往生すること、至誠等の三心なり。四には帰向して往生する、浄土の事を聞きて帰向し、称念し、讚嘆すること等なり」と。いまわたくしには、諸経の行業、総じてこれをいへば、『梵網』戒品^(二)を出でず。別してこれを論ずれば、六度を出でず。細しくその相を明かせば、その十三あり。一には財・法等の施、二には三帰・五戒・八戒・十戒等の多少の戒行、三には忍辱、四には精進、五には禪定、六には般若第一義を信ずること等これなり、七には菩提心を発すること、八には六念を修行すること、九は法・僧・施天、これを六念といふ。十六想観はまたこれを出でず。九には大乘を誦誦すること、十には仏法を守護すること、十一には父母に孝順し師長に奉事すること、十二には慍慢をなさざること、十三には利養に染せざることなり。『大集』の「月蔵分」の偈^(三)にのたまはく、

「樹の菓繁ければ、すみやかにみづから害するがごとし。竹蘆の実を結ぶもまたかくのごとし。
任驟の懐すれば、自身を喪ぼすがごとし。無智にして利を求むるもまたしかり。
もし比丘ありて、供養を得、利養を染求し堅く着するものは、
世においてさらにかくのごとき悪はなし。ゆゑに解脱の道を得ざらしむ。
かくのごとくして利養を貪求するものは、すでに道を得をはりぬれども、還りてまた失ふ」と。

また『仏藏経』^(四)に、迦葉仏、記してのたまはく、「釈迦牟尼仏は多く供養を受けたまはんがゆゑに、法まさに疾く滅すべし」と云々。如来なほしかり。いかにいはんや凡夫をや。大象窓を出づるに、つひに一の尾のために礙へらる。行人家を出でたれども、つひに名利のために縛せらる。すなはち知りぬ、出離の最後の怨は、名利より大なるものはなし。ただ浄名大士は、身は家にあれども心は家を出で、薬王の本事は、塵寰を避りて雪山に居せり。いまの世の行人もまたかくのごとくすべし。みづから根性を料りて、これを進止せよ。もしその心を制するこ

とあたはずは、なほすべからくその地を避るべし。麻のなかの蓬^(五)、屠辺の殿^(六)、好悪いづれにかよれるや『仏藏経』を見て是非を知るべし。

- (1) 慧遠法師 浄影寺慧遠『観経義疏』末(『大正蔵』三七、一八三頁上(中))。
- (2) 『梵網』戒品 『梵網経』戒品(『大正蔵』二四、九九七頁中)に説く「十重・四十八輕戒」の教説を指す。本講読(八)五頁(33)参照。
- (3) 『大集』の「月蔵分」の偈 『大集経』卷四(『大正蔵』一三、三〇五頁下略抄)。
- (4) 『仏藏経』 『仏藏経』卷中(『大正蔵』一五、七九三頁上)。
- (5) 麻のなかの蓬 『荀子』勸学篇に、「蓬も麻中に生ずれば、扶けずして直し」とある。本来は曲がりくねっているヨモギでも、麻の畑ではまっすぐに育つように、人は善人と交わるることによって自然と善人になってゆくというたとえ。
- (6) 屠辺の殿 『付法蔵因縁伝』卷六(『大正蔵』五〇、三二二頁上)に見える譬喩。戦争に使うゾウの厩舎が焼失したので、新しい厩舎を寺院の近く建てたところ、ゾウの気性が柔和になってしまった。そこで今度は屠場の近くに移したところ、以前にも増して悪心が烈しくなったという。

【現代語訳】

第二に、諸行を総括する。浄影寺慧遠は、往生浄土の因となる主要な行いを、四項目にまとめて提示している。「第一に、観念の修行によって往生する。『観無量寿経』の十六観などである。第二に、善行の修行によって往生する。『観無量寿経』に説く三つの善行などである。第三に、心を鍛える修行によって往生する。『観無量寿経』に説く至誠心等の三心などである。第四に、仏の教えに帰依することによって往生する。浄土の教えを聞いて帰依し、仏の名を称え讃えることなどである」と。

私見を述べるならば、諸経に説く実践を総括すると、『梵網経』戒品の教説に収まる。個別の実践を論ずるならば、六波羅蜜の範疇に収まる。その内容を詳しく示すと、十三項目を挙げることができる。第一に、財物や教法を施し与えること。第二に、三帰戒・五戒・八戒・十戒等の様々な規範を守ること。第三に、いかなる困難にも耐え忍ぶこと。第四に、悟りを目指して努力すること。第五に、精神を鍛え、研ぎ澄ますこと。第六に、平等の智慧を完成すること(真如を信ずること)のできる心を獲得するなどである。第七に、菩提心を発すること。第八に六念の実践を行うこと(仏・法・僧・戒・施・天)を念ずること(六念と言ふ)。「観無量寿経」の十六想観もその範疇

に収まる。第九に、大乘経典を読み唱えること。第十に、仏法をいつまでも護り伝えようとすること。第十一に、父母に孝行し、師や先輩によく仕えること。第十二に、傲慢なふるまいをしないこと。第十三に、自分の利益に固執しないことである。

『大集経』月蔵分に、次のように歌われている。

「木の実がみのりすぎるとき　その木はやがて枯れてゆく

竹や蘆も実を結んで　枯れていのちを終えるという

小ウマやロバは子を産んで　自分はずぐに死んでゆく

人に施す智慧なくて　利を求める者も同じこと

悟りを目指して修行しながら　お供えものを貪るなんて

なににも増して愚かなことよ　けっして悟りは得られまい

自分の利益を追いかけるとき　悟りの智慧は逃げてゆく」と。

また『仏蔵経』に、迦葉仏が次のような予言をしている。「釈迦牟尼仏は、たくさんのお供え物を受けられるから、その教えは早くに滅びるだろう」と。

積尊でさえそうなのだから、凡夫はなおさらだろう。大きなゾウが窓から出ようとして、最後に尾っぽが引っかかって出られないように、悟りを目指して出家しても、名誉や財産の誘惑にしばらくとらわれると仏道を成就できないのである。悟りを邪魔する最後にして最大の難関は、名誉や財産への欲望である。維摩居士は、在家信者の姿をしながら出家の心を持ち、薬王菩薩は前世に、世間のけがれを避けてヒマラヤの山中に住んだと言う。今の修行者も見習わなければならない。自分の能力に鑑みて行動せよ。もし自分の心を制御できないと思ったら、その場を離れよ。麻の畑に生えるヨモギと、屠場の近くで飼育される象と、どちらを取りどちらを捨てるべきであろうか『仏蔵経』を見て判断せよ。